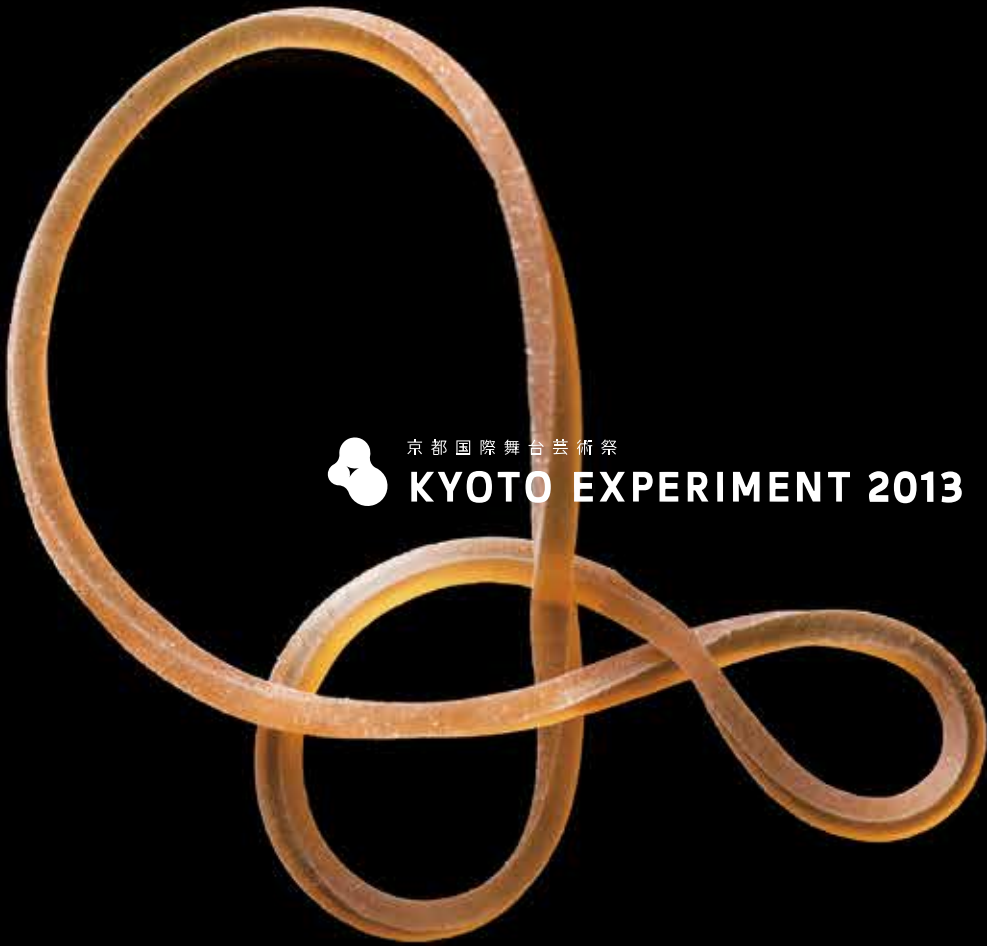


Kyoto International Performing Arts Festival 2013



# KYOTO EXPERIMENT



京都国際舞台芸術祭

**KYOTO EXPERIMENT 2013**

## 目次

ごあいさつ .....	4
「好きにしよし」 橋本裕介 .....	6
チェルフィッチュ .....	12
マルセロ・エヴェリン/デモリション Inc. ....	16
庭劇団ベニノ .....	20
木ノ下歌舞伎 .....	24
She She Pop .....	28
Baobab .....	32
池田亮司 .....	36
ロラ・アリアス .....	40
ビリー・カウイー .....	44
高嶺格 .....	48
FRINGE「使えるプログラム」 .....	54
FRINGE「オープンエントリー作品」 .....	58
関連イベント .....	62
クレジット .....	70
チケット .....	72
会場アクセス .....	74
カレンダー .....	76

## Contents

Greeting .....	4
“Do as you like” Yusuke Hashimoto .....	6
chelfitsch .....	12
Marcelo Evelin / Demolition Inc. ....	16
Niwagekidan Penino .....	20
Kinoshita-Kabuki .....	24
She She Pop .....	28
Baobab .....	32
Ryoji Ikeda .....	36
Lola Arias .....	40
Billy Cowie .....	44
Tadasu Takamine .....	48
Fringe “The Useful Program” .....	54
Fringe “Open Entry Performance” .....	58
Related Events .....	62
Credits .....	70
Ticket Information .....	72
Access .....	74
Calendar .....	76

## ごあいさつ

「実験室での科学者の生活は、多くの人が想像しているような牧歌的でなまやさしいものではない。それは物に対する、周囲に対する、特に自己に対する粘り強い戦いのだ」。

かつてマリー・キュリーはそう言いましたが、「科学者」を「芸術家」と言い換えれば、まさにこの「京都の実験」を表すにふさわしい言葉になると私は思います。

毎年、国内外の気鋭のアーティストの皆様が果敢な挑戦を繰り返し広げられ、回数を重ねるごとに進化を続けている「京都国際舞台芸術祭」。第4回を迎える今回も、多彩なプログラムを通じて、数々の素晴らしい“実験結果”が生まれることを大いに期待しています。

結びに、森山直人委員長をはじめ京都国際舞台芸術祭実行委員会の皆様、並びに関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本芸術祭が全ての皆様にとって心に末永く残るものとなりますよう祈念いたします。

京都市長 門川大作

KYOTO EXPERIMENTも、早いもので、今年で4回目を迎えることになりました。

この種のフェスティバルが、日本ではしばしば短命に終わりがちな状況を考えると、最初の3回をなんとか乗り切ることができたことは、ようやく「継続」のための土台が固まりつつあるように見えます。幸い、この間、フェスティバルの国内外における認知度も増し、観客数も順調に伸びてきたことは、嬉しいかぎりです。

しかし、これからが、本当の「闘い」なのだと思います。フェスティバルは、ただ継続していればいいというわけでは全くないからです。何より重要なことは、そうした個々の活動を通じて、このフェスティバルが、どんな「未来」を切り拓き、その成果をどんな「未来」の作家や観客へバトンタッチしていけるのか、ということなのですから。

実は、このフェスティバル自体が、多くの先達のバトンを受け取ったところに成立しています。たとえば、いまからちょうど10年前、京都を拠点に舞台芸術シーンに多大の貢献をなされた遠藤寿美子氏が亡くなりました。彼女はいわば「EXPERIMENT」を、一人で体現していたようなプロデューサーでした。私たちのひそかな夢は、そんな先達が、のけ反って驚くような実験と出会いを組織することです。そしてまた、「未来」を背負って立つ若い世代が、今度は私たちをのけ反って驚かせるような実験や出会いの場を組織してくれることでもあります。

よりよくバトンを受け取るために、そしてよりよくバトンを未来に手渡すために、みなさまの一層のご支援を、心からお願い申し上げる次第です。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 森山直人

## Greeting

Marie Curie once said, “A scientist in his laboratory is not only a technician... If I see anything vital around me, it is precisely that spirit of adventure, which seems indestructible and is akin to curiosity”.

If you replace the word “scientist” with “artist”, that describes our Kyoto Experiment very well.

Every year, passionate artists from around the world put on their performances with a bold challenge and the festival continues evolving as a result. I very much look forward to seeing more tremendous results from the wide variety of programs at the 4th Kyoto Experiment.

Finally, I would like to express my sincere thanks to all those whose contributions have made the festival a reality and my hope that the festival will be a rich, unforgettable experience for everyone.

Mayor of Kyoto  
Daisaku Kadokawa

Kyoto Experiment is happy to welcome the 4th festival this year.

Considering that similar festivals have tended to be short lived in Japan, the fact we've met the challenge of running three festivals shows means that we've cultivated the foundation for its continuation. Fortunately, the festival has been gaining more and more recognition in Japan as well as overseas and I am delighted to see that the audience is steadily growing.

However, the real challenge lies in the days ahead. Because simply continuing is not enough to call the festival a success, it is important to break new ground each year and to hand down the outcomes to the artists and audiences of the future. What kind of future we carve out, and for whom, is our task.

In fact, Kyoto Experiment was established by taking on the torch from those before. The late Sumiko Endo, to name one, was based in Kyoto and made an enormous contribution to performing arts in Japan. As a producer, she embodied what Kyoto Experiment is striving for. Our ambition is to organize experiments and encounters that stimulate those who came before, those who come after us, and, in turn, to stimulate us back with their inspiration and creativity.

We appreciate your continued support for us to carry on and pass the torch to the future.

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Chairman  
Naoto Moriyama

## 「好きにしよし」

KYOTO EXPERIMENTは今年で4回目を迎える。これも、多くの観客の皆さんに足を運んでもらえているからこそである。しかし考えてみると不思議な気がする。このフェスティバルで紹介するアーティスト・作品は、日本や京都で初めて紹介するものだったりして、名前すら聞いたことがないものも稀ではないからだ。おそらくこういことだろう。観客の皆さんは、「知っているから観に来る」のではなく、「知らないからこそ観に来ている」のだ。これは舞台の世界だけの話ではなく、現在の日本の社会状況から言っても驚くべきことである。

十数年前のある時期まで、私たちの住む社会は、海外を見て憧れてばかりいるよりも、自分の立っている場所に何もかもあり、手に入ると信じたがっていたような気がする。そのほうが、活気も出るからだ。いわゆる消費活動の面だけでなく、アートの世界でも、競うように著名なアーティストを招聘するような企画が乱立していた。もちろんそれでうまく行っているときは良かった。余裕があるから、価値の定まらない先鋭的な表現にも、ついでのようにチャンスがあった。しかし、それでは立ち行かなくなると、社会とそれを構成している私たちは、自信の無さの裏返しのように、個人や他人に責任を押し付けるようになった。物議を醸すことには蓋をしようとして、理解出来ないのは自分ではなく相手のせいだと決めつける。さらに自分の身の回りでも起こらなかったことは、これから先も起こることはないと考えようになった。私たちの生活を一変させてしまうような事件、事故、災害は、起こらないだろうと。自分の想像力の及ばないところに、見ず知らずの他人の営みがあるとは考えないようになった。しかし、それは単なる希望であって、正しい認識ではない。私は当初このテキストを書くに当たって、プログラムに関連させながら、私たちの「忘れっぽさ」について書こうと思っていたが、考えが少し変わった。忘れっぽいのではなく、希望的観測を元に、イヤな現実に対して「見ないふり」をしているのだ。それはあまりに無責任ではないだろうか。

そんな自己中心的な考えの行き着いたところが、不寛容な今の社会だ。不寛容と戦う、というような勇ましいことは言わない。しかし、せめて一矢報いたい。なぜならこれはアートにとって全く分が悪い状況で、ましてや、Experiment＝実験と謳っているこのフェスティバルなど、不利であることこの上ないからだ。

だから、「知らないからこそ観に来る」好奇心旺盛な観客に加え、冒険心旺盛なアーティストたちとの連帯をもとに、このフェスティバルという場で出来ることを追求したい。「ここでないところに、すばらしいものが次々に生まれている... 私たちはうっかりしていた!」と多くの人たちが気付くようなきっかけにしたいと強く思っている。そのために、フェスティバルならではのワクワク感は大事にしたいし、しなやかに多様な人々とつながっていける場にしようと思う。

KYOTO EXPERIMENTはこれまで3年にわたって、単なる作品の発表に留まらずアーティストたちと様々な関係を構築してきた。一度きりの出会いに終わらぬよう、滞在中に京都という都市や人々との交流を図るなどして、アーティストにも何かを持ち帰ってもらえるような取り組みを行ってきた。そんな「実験」の結果として、4回目となる今回は、公式プログラム10演目中7演目がフェスティバルとの共同製作となった。例えば、ブラジルと日本との行き来の中で生まれたマルセロ・エヴェリンの新作、池田亮司や高嶺格の長期的な新プロジェクト、ビリー・カウイーとのコラボレーション、これらが作品として結実し今回発表出来ることは非常に喜ばしいことである。それが意味するところは、フェスティバルが単なる発表としての場ではなく、創造の場でもあるというフェス

ティバル自体の核心をようやく体現出来るようになったということであり、観客に世界初演あるいは日本初演というワクワクするような貴重なチャンスを提供出来るようになったということなのだ。

これまでKYOTO EXPERIMENTでは、どちらかというと「クロスジャンル」的な作品を数多く紹介し、従来の演劇ファンやダンスファンに留まらない、より広い層に舞台芸術の魅力を伝えられるよう心がけてきた。これが功を奏したのか、毎年観客動員数は増え、感謝の念に堪えない。そこで、好奇心旺盛なKYOTO EXPERIMENTの観客との信頼関係のもと、今年は「演劇」というメディアの原点を再確認するような演劇作品にもフォーカスを当て、いくつか紹介したいと考えている。独特の身振りとそれに呼応した発話によって注目を浴びたチェルフィッチュが切り拓く新境地。東西ドイツの分断と再統一を、実際の東西ドイツ出身者たちによる対話によって描き出す、She She Pop。作家本人の母親の手記を元に、アルゼンチンの現代史を描き出すロラ・リアス。現代的な新しい切り口で歌舞伎を再発見する取り組みで脚光を浴びている木ノ下歌舞伎。ドイツ語やスペイン語といったいわゆる「外国語」だけでなく、日常のものとは異なるアーティスト独自の「日本語」は、当然耳慣れない言葉であり、それに耳を傾けることはきっと“歯ごたえのある”観劇体験になるだろう。しかし、そのことがかえって、言葉の持つ役割について考えるきっかけになり、またそれらの作品がテーマとする「歴史」「記憶」「忘却」とも関わりながら、「演劇」そのものが本来持っているメディアとしての有効性を再確認できるはずだと考えている。

KYOTO EXPERIMENTは、新しい出会いにも意欲的である。驚異的な造形空間で独自の世界観を展開する庭劇団ベニノの京都初登場は、心待ちにしていた観客も多いに違いない。そしてFRINGE企画に3年続けて参加してきたBaobabが公式プログラムに初登場することは、感慨深く思う観客も多いはずだ。さらに公式プログラムだけではなく、多彩な関連プログラムを実施していることは強調しておきたい。国内のアーティストを紹介する場としての「FRINGE企画」は今年からリニューアルし、演出家羽鳥嘉郎による「使えるプログラム」と、公募による「オープンエントリー作品」の2本柱として展開する。また、今年のフェスティバルのメインイメージとなった作品を制作した美術作家松延総司による展覧会。現在の舞台芸術を取り巻く問題を思考し、広く共有するため、「舞台芸術制作者オープンネットワーク」との共催で実施するシンポジウム。フランス人振付家ダヴィド・ヴォンバクの作品製作をバックアップするアーティスト・イン・レジデンスプログラム。そしてプレ事業として、未来を担う子どもたちに向けたアートプロジェクトと、アートコーディネーター育成事業をこの春から夏にかけて既に実施している。あらゆる角度から舞台芸術に迫ることで、フェスティバルがそして舞台芸術が未来のビジョンを描き出すことを目指している。

本文のタイトル「好きにしよし」とは、「好きなようにしなさい」という意味の京ことばであり、剛腕でならした舞台プロデューサーの故遠藤寿美子の口癖だった。彼女が亡くなって10年が経つ。この言葉に励まされて、どれだけのアーティストや関係者が、状況を作ってきたことだろう。今の私たちの活動が、あのように後に続く人々を励ましているだろうか。このフェスティバルがそであるように努めたいと思う。

KYOTO EXPERIMENT プログラム・ディレクター 橋本裕介とスタッフ一同

## “Do as you like”

This year Kyoto Experiment marks its 4th festival. The Festival's success is entirely due to the support of our audience. This success is especially remarkable considering that many of the artists and works we introduce are often completely unknown in Japan. This is indeed one of the aims of Kyoto Experiment. The way we see it our audience comes to see the performances not because “they already know” but because “they don't know”. That is very inspiring in terms of where today's Japanese society stands as well as in terms of the world of performing arts.

It feels like up until a decade ago there was a period of time when Japanese people wanted to believe that we had everything we needed right here rather than always pinning for things from abroad. This way of thinking helped to motivate us too. As a result, everyone was going after famous brands and artists, both in the commercial world as well as in the art industry. That was working fine as long as the system could afford to support something unknown; when edgy ideas whose values were not yet determined still had a chance. But once that framework stopped functioning, the society, and we who make up the society, started to shift responsibility to others as if the flip side of a lack of confidence. In an effort to stem criticism people have decided that it is someone else's fault if they don't understand something. Furthermore, people stopped thinking about the future; assuming that an accident or disaster which could completely change our lives will never happen to us (just because it hasn't happened yet). We can no longer imagine that some people we don't know have their own lives out there. We stopped doubting our own imaginations. It is a mere hope and not a proper recognition of the world. I was originally thinking of writing about how “forgetful” we are in relation to the festival's program. But I have a slightly different idea now. I've come to think not that we are forgetful but we “pretend not to see” the reality we don't want to face based on wishful thinking. And it is pretty irresponsible thinking to do.

That kind of self-indulgent thinking helped to create today's intolerant society. I'm not brave enough to declare a war on intolerance but I do want to fight back, otherwise art does not stand much of a chance in this society. This is especially true of a festival like ours, with its mission of being experimental. It is our strategy to link arms with the audience who are curious to see these unknown and adventurous artists, in order to pursue the counter act. The festival gives us a platform for this action. I strongly hope that our action triggers people's awareness. Awareness in which people see something captivating is coming into being at somewhere “not here” and note how inattentive they might have been. I am very aware that it is necessary for the festival to be thrilling and flexible in order to be able to link with diverse people.

In addition to introducing finished works, Kyoto Experiment has developed various relationships with artists over the last 3 years. In order to sustain long term rather than one-time relationships with them, we have come up with programs in which artists can get something more out of their experience in Kyoto, interacting with the city and its people. As a result, 7 works out of 10 at this year's festival are co-produced by us and the artists. For instance, Marcelo Evelin's new work is the outcome of our exchange between Brazil and Japan. The work of Ryoji Ikeda and Tadasu Takamine is part of a new long-term project. We also collaborated on Billy Cowie's production. We are delighted to see these projects reach fruition and be able to be performed at the festival. What this implies is that the festival has finally started to embody its mission to serve not only as a

stage to perform but also as a place for creation. We are proud to be able to provide our audience with the exciting opportunity to see pieces that will be premiere not only in Japan but the world.

Kyoto Experiment has strived to introduce cross genre works in order to bring the allure of performing arts to a broader audience not just existing dance and theater fans. I'm not sure if that was the reason why, but our audience has steadily grown every year and I am overcome with gratitude. Now that I am confident that we have a mutual trust relationship with our curious audience, we wanted to be a little bit more challenging and feature works that revalidate the origin of “theater” as a medium for this year. chelfitsch broke new ground by its peculiar choreography and extremely colloquial language. She She Pop illustrates the division and re-unification of East-West Germany through the dialogue between East-born and West-born performers. Lola Arias portrays the modern history of Argentina through the diary of her own mother. Kinoshita-Kabuki rediscovers Kabuki Theater by exquisitely adding a fresh dimension.

The language of artists, whether German, Spanish or Japanese, contains words possibly uncommon to the audience. Listening to their words can make for a theater experience somewhat difficult to ingest, but the hope is that the digestive process triggers in the audience thoughts on the role of language. And that thought can be a cue to reevaluate “theater” as a medium, while echoing to the theme of each work, “history” “memory” and “oblivion”.

Kyoto Experiment is ambitious for new encounters as well. There is great anticipation for the Kyoto debut of Niwagekidan Penino, a company that creates a very original world with breathtakingly artistic use of space. Baobab makes its debut in the official program after 3 years of participating in the Fringe program. I should mention that our related programs are as diverse as the official program. The Fringe program, which aims to introduce young Japanese artists, is being re-launched as a two pronged program: “The Useful Program” by Yoshiro Hatori, theater director and “Open Entry Performance” in which anyone can apply. There is also an exhibition by Soshi Matsunobe who made the visual theme work for this year's festival. We co-host a symposium with Open Network for Performing Arts Management in order to examine and share the issues related to today's performing arts. For this year's residency program, we welcome David Wampach, a French choreographer and support his production process. As a pre-event, we have conducted art projects for children and an art coordinator training program since the spring, both aiming to foster human resources for next generation. Kyoto Experiment approaches performing arts from every possible angle to seek a place where performing arts can paint a vision of the future.

“Do as you like” was the favorite phrase of Sumiko Endo, the legendary Kyoto performing arts producer. It's been 10 years now since she passed away. Many artists and producers who have been motivated by her words helped to build today's performing arts scene. Are we able to encourage younger talents like she did? It is our hope for Kyoto Experiment to be a source of such inspiration.

Kyoto Experiment Program Director Yusuke Hashimoto and Festival Team



# チェルフィッチュ

## Chelfitsch

YOKOHAMA



photo: Kamei Mousa

## 地面と床

Ground and Floor

🕒 90 min (新作 | 日本初演 / New Creation | Japan Premiere)

📅 9/28 (Sat) 15:00-, 19:00  
9/29 (Sun) 14:00-📍

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance Talk

\*開場は開演の10分前  
\*英語、中国語字幕あり

\*The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

\*Performed in Japanese  
with English and Chinese  
subtitles.

チェルフィッチュの「音楽劇」!

演劇という装置の有効性をアップデートする大なる野心

A chelfitsch musical theater !?

An ambitious work aiming to update the validity of the device we call "theater".

超リアル日本語とも評されるセリフと、日常的所作を誇張しているような／いらないようなノイズな身体性で、瞬間に日本の現代演劇を牽引する存在となったチェルフィッチュ。KYOTO EXPERIMENT 2010 では代表作の一つ『ホットベッパー、クーラー、そしてお別れの挨拶』で京都の観客を大いに沸かした。そんなチェルフィッチュの最新作『地面と床』は、我々が彼らの作品に抱いていた印象を大きく変更させるものとなる。何と彼らは、初のそして独自の「音楽劇」に挑むのだ。盟友とも言えるバンド「サンガツ」が、俳優とバンドの「生演奏」でセッションをするように楽曲を制作し、実際の舞台上でも俳優の身体と音楽が同じレイヤーに置かれることになる。これはある意味、チェルフィッチュ流の〈能楽〉と言えるのかもしれない。本作の舞台は、日本語がほとんど誰にも伝わらなくなった近未来の日本。言葉と故郷を失いつつある社会に生き、記憶と忘却の狭間で揺れ動く〈生者〉たちと、彼らを憂う〈死者〉の利害が対立する。2011年に日本で起きた震災とそれが引き起こした日本社会への影響は、否応なくここに響き合う。本年5月にブリュッセルで世界初演を迎え、その後の欧州ツアーを経て、今回の京都公演が日本初演となる。演劇の新しい形式を探求することから、いかに演劇という装置を有効にアップデートするかの試みへ。チェルフィッチュは次の次元へ向かっている。

chelfitsch quickly became a leading figure in Japanese contemporary theater with its extremely colloquial language and peculiarly noisy choreography derived from everyday gestures. Their appearance in Kyoto Experiment 2010 was very well received by the Kyoto audience. However, their most recent work *Ground and Floor* aims to change our perspective on chelfitsch. This original work marks their first step into the "musical theater". Collaborating with fellow band "Sangatsu", the actors and the band play live sessions together to compose the music. The physicality of actors and the music are given equal significance on the stage. It could be said that this is chelfitsch's take on Noh Theater. *Ground and Floor* is set in Japan in the near future Japan where nobody really understands Japanese anymore. Living in a society that is losing its language and homeland, the interest of the "living", who waver between memory and oblivion, and the "dead" who are concerned about them, conflict. The large earthquake that shook Japan in 2011 and its aftermath clearly echo throughout the work. It had its international premiere in Kunstenfestivaldesarts (Brussels) in this May. After touring Europe, the three performances in Kyoto will mark the Japan premiere. From exploring a new style of theater to updating the validity of the device called "theater", chelfitsch evolves to the next dimension.

📍 京都府立府民ホール アルティ  
Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI

作・演出: 岡田利規  
出演: 山縣太一、矢沢誠、佐々木幸子、  
安藤真理、青柳いづみ  
音楽: サンガツ  
美術: 二村周作  
ドラマツルク: セバスチャン・プロイ  
衣装: 池田木綿子 (Luna Luz)  
解剖学レクチャー: 楠美奈生  
舞台監督: 鈴木康郎  
照明: 大平智己  
音響: 牛川紀政  
映像: 山田晋平  
製作: クンステンフェスティバルデザール、  
チェルフィッチュ  
企画制作: プリコグ  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT、フェス  
ティバル・ドートンヌ(パリ)、Les Spectacles  
vivants - Centre Pompidou (パリ)、HAU  
Hebbel am Ufer (ベルリン)、ラ・パティエ  
フェスティバル・ド・ジュネーヴ、KAAT 神奈  
川芸術劇場、De Internationale Keuze van  
de Rotterdamse Schouwburg (ロッテルダ  
ム)、ダブリン・シアター・フェスティバル、テア  
トル・ガロン(トゥールーズ)、オナシス・カル  
チュラル・センター(アテネ)  
レジデンシーサポート: KYOTO EXPERI-  
MENT、KAAT 神奈川芸術劇場  
協力: 急な坂スタジオ  
主催: 京都府立府民ホール アルティ  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Playwriting & direction: Toshiaki Okada  
Cast: Taichi Yamagata, Makoto Yazawa,  
Yukiko Sasaki, Mari Ando, Izumi Aoyagi  
Music: Sangatsu  
Stage design: Shusaku Futamura  
Dramaturge: Sebastian Breu  
Costume: Yuko Ikeda (Luna Luz)  
Anatomy lecture: Nao Kusumi  
Stage manager: Koro Suzuki  
Lighting designer: Tomomi Ohira  
Sound director: Norimasa Ushikawa  
Video director: Shimpei Yamada  
Executive production: chelfitsch  
Production: Kunstenfestivaldesarts  
Associated production: precog  
Co-production: Kyoto Experiment, Festival  
d'Automne à Paris, Les Spectacles vivants  
- Centre Pompidou (Paris), HAU Hebbel  
am Ufer (Berlin), La Bâtie - Festival de  
Genève, KAAT (Kanagawa Arts Theater),  
De Internationale Keuze van de Rotterdamse  
Schouwburg, Dublin Theatre Festival,  
Théâtre Garonne (Toulouse), Onassis  
Cultural Center (Athens)  
Residency support: Kyoto Experiment,  
KAAT (Kanagawa Arts Theater)  
Special thanks to Steep Slope Studio  
Co-presented by Kyoto Prefectural  
Citizen's Hall ALTI  
Presented by Kyoto Experiment



## チェルフィッチュ

岡田利規が全作品の脚本と演出を務める演劇カンパニーとして1997年に設立。チェルフィッチュ(chelfitsch)とは、自分本位という意味の英単語セルフィッシュ(selfish)が、明晰に発語されぬまま幼児語化した造語。『三月の5日間』(第49回岸田國士戯曲賞受賞作品)などを経て、日常的所作を誇張しているような／していないようなのだららとしてノイジーな身体性を持つようになる。その後も言葉と身体の関係性を軸に方法論を更新し続け現在に至る。2007年5月ヨーロッパ・パフォーミングアーツ界の最重要フェスティバルと称されるクステンフェスティバルデザール2007(ブリュッセル)にて『三月の5日間』が初めての国外進出を果たして以降、アジア、欧州、北米にて海外招聘多数。2011年には『ホットペッパー、クーラー、そしてお別れの挨拶』が、モントリオール(カナダ)の演劇批評家協会の批評家賞を受賞。

<http://chelfitsch.net>

### chelfitsch

Founded in 1997 by Toshiki Okada, who writes and directs all of the company's productions. The name "chelfitsch" comes from a baby's mispronunciation of the English word "selfish." After *Five Days in March*, which won the 49th Kunitada Award for Best Script, chelfitsch began to refine its aesthetics by juxtaposing words with a peculiarly noisy choreography derived from everyday gestures. It has been exploring a way to grasp the relationship between body and language. The company's international debut was in 2007, when *Five Days in March* was performed at Kunstenfestivaldesarts in Brussels. chelfitsch's works have been presented to great acclaim at leading international theatre festivals and venues throughout Europe, North America and Asia. In 2011, *Hot Pepper, Air Conditioner and the Farewell Speech* won the critics' award from L'Association québécoise des critiques de théâtre for the 2010-2011 season.



photo: Kami Mousse

## INTERVIEW

### 岡田利規インタビュー [聞き手:福永信(小説家)]

**福永:**『地面と床』にまつわる岡田さんの文章の中で、「死者との外交的努力が必要」という言葉があって、面白いと思いました。

**岡田:**たとえば人が死んだら墓場を作りますよね。でもその墓場は、家の庭ではなく、生きている人と少し離れたところに作られる。その死者との関係ということを考えていた時に、ドラマトゥルクのセバスチャン・ブレイから〈外交〉という言葉が出てきました。〈外交〉というのは、相手を自分と対等な存在と捉えて、こっちの望むことを手に入れるために、ある程度相手の言い分も飲むということ。その死者との〈外交的努力〉が必要だという認識が薄れてきて、生者は死者に対して傲慢になってきているのではないかと、震災以降自然に考え始めました。死者について考えるということは、歴史について考えることであり、もしかしたら国家について考えることなのかもしれませんが、そういう関係を死者との間に結ばないと、たぶん生者の世界にすごく現実的な不利益を被るんですよ。

**福永:**生者と死者の利害の対立とは、どのようなことでしょうか。

**岡田:**原発に近い地域に住んでいる人たちがそこを離れない理由の一つとして「墓を守る」ということがある。まず「なに馬鹿なことを言ってるんだ」と思いました。お墓にいてるのは死んでいる人なんだから、その人のために生きている人間が死ぬ必要はない。でも本当にそうだろうか考えた時に、そこで死者の利害と生者の利害が対立しているんだと感じて、その問題は無視できないと思いました。

**福永:**今回の作品では、日本語は減びゆく言語として語られますね。

**岡田:**日本語の話者が減っていくイメージは、今の自分にとってはリアルですね。と同時に、とても小さい領域かもしれないけれど、舞台はオルタナティブな日本語を作ることができる場でもある。それをやりたい気持ちは強くあります。

**福永:**京都で日本初演を迎えるにあたって、どういう思いですか。

**岡田:**日本での上演は特別だと思っています。ぼく自身の緊張感も違うんですよ。『わたしたちは無傷な別人である』のころから作品がダイレクトになってきているのですが、その意味でも『地面と床』は集大成のようなものを作れたような気がしています。

※インタビューの全文は、KYOTO EXPERIMENT公式ウェブサイトでご覧いただけます

福永信

1972年生まれ。小説家。著書に『アクロバット前夜』、『コップとコッペパンとペン』、『星座から見た地球』、『-----』、『三姉妹とその友達』など、編著として『こんにちは美術』全3巻がある。REALKYOTOでブログ連載中。

### Toshiki Okada Interview by Shin Fukunaga

**Fukunaga:** You've mentioned that "we need diplomatic efforts with the dead" in one of your texts about *Ground and Floor*. I thought that was interesting.

**Okada:** For instance, when a person dies, we make a grave for him. But not in his own yard but somewhere a bit far from the living. As I was thinking about our relationship with the dead, Sebastian Breu, our dramaturge, used the word "diplomatic". "Diplomacy" is about being on an equal footing with the other party and approving certain requests in order to obtain what we want. After the 3.11 earthquake I started to think that this notion of needing "diplomatic efforts" with the dead has been less acknowledged and that the living have become arrogant toward the dead. To think about the dead is to think about history, and possibly about the nation too. Anyhow, without establishing a relationship with the dead, I think that we, the living, suffer an existential loss.

**F:** What are the conflicts of interest between the living and the dead?

**O:** One of the reasons that people living near the nuclear power plant don't leave is to protect their family graves. I first thought it's absurd. The ones in the grave are the dead. We don't need to die for the dead. But when I really thought about it, I realized that the interests of the living and the dead are conflicted. And that's inescapable.

**F:** In this work, you are dealing with Japanese as a dying language.

**O:** The diminishing number of people who speak Japanese feels pretty real to me now. At the same time, even though it's a small domain, theater is where we can create alternative Japanese. That's something I want to explore.

**F:** Do you have any specific feeling toward your work's Japan premiere in Kyoto?

**O:** Showing it in Japan is special. It gives me a different sense of tension. Since *We are the undamaged Others*, my work has become much more direct. In that sense, *Ground and Floor* feels like a culmination of my work.

Shin FUKUNAGA

Born in 1972. Author of *Acrobat Zen'ya*, *Cup, Coppe-Pan and Pen*, *The Earth Seen From Constellations*, -----, *Three sisters and their friend*. Wrote and edited *Hello, Arts* (3 volumes). Blogs found on Realkyoto.

マルセロ・エヴェリン/デモリション Inc.

marçetelh effeaffin/demilh affittih n.inçt.

TERESINA

DANCE

## 突然どこもかしこも黒山の人だかりとなる

*Suddenly everywhere is black with people*

🕒 60 min (新作 | 日本初演 / New Creation | Japan Premiere)

📅 9/28(Sat) 19:00- \*開演と同時に開場  
9/29(Sun) 14:00-19:00- \*Door doesn't open until the performance starts.  
9/30(Mon) 20:00- ♿  
10/1(Tue) 20:00-

📍 関連イベント レクチャー「〈周縁〉をめぐって」  
Related Event Lecture "About [Marginality]" →p.62

📍 京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium

🕒 開演後は入場不可。  
客席のご用意はありません。  
12歳未満は保護者の同伴が必要。

No entry after the performance starts.  
Regular seats are not provided.  
Children under 12 must be accompanied by parents.

暗闇に蠢く、漆黒のパフォーマーたち。  
知性と肉体を揺さぶる、ブラジルの異才による最新作

**Performers painted black writhe in the darkness.  
The latest evocative work by one of Brazil's greatest talents.**

マルセロ・エヴェリンはブラジル、それもテレジナという周縁の地を拠点に、果敢に活動を繰り広げる振付家・ダンサーであり、2011年のKYOTO EXPERIMENTでは『マタドウロ(屠場)』で、センセーショナルな日本デビューを飾った。それは、仮面をかぶったほぼ全裸のパフォーマーが、1時間に渡ってひたすら輪になって走り続けた果てに、観客を挑発的に凝視するという作品。高揚と混乱の渦に否応なく観客を引きずり込んだことは記憶に新しい。更に昨年KYOTO EXPERIMENT 2012の一環で、本作『突然どこもかしこも黒山の人だかりとなる』(原題:De repente fica tudo preto de gente)の滞在制作を行った。その後、リオデジャネイロのコンテンポラリーダンスの祭典「パノラマ・フェスティバル」にて世界初演を迎えた本作が、ついに日本上陸を果たす。印象的な作品タイトルは、群衆論で知られるノーベル賞作家、エリ阿斯・カネッティの著作『群衆と権力』(1960)の一節から。舞台と客席の区別がない、仄暗い空間へと誘われた観客は、そこで全身を真っ黒にしたパフォーマーたちと対面する。ブラジル、オランダ、日本のダンサーからなるパフォーマーたちは、もはやその出自も個々の人間すらも判別出来ないひとつの塊として、観客と渾然一体となる。混沌とした現代社会に鋭い問いを突きつける野生と知性が共存する舞台。視聴覚を超えて、全身を射抜くような観劇体験が待っているはずだ。

Marcelo Evelin is a bold choreographer and dancer based in Teresina, Brazil. His debut at Kyoto Experiment 2011 with *Matadouro* was sensational. Featuring nearly naked masked performers provocatively staring at the audience after running intensely in a circle for a full hour, he drew the audience inescapably into exaltation and chaos. In addition, he stayed in Kyoto last year as part of the Kyoto Experiment 2012 residency program where he created *De repente fica tudo preto de gente*. The work, which premiered internationally at Panorama Festival in Rio de Janeiro, finally comes to Japan. The unique title is taken from *Crowds and Power* (1960) by Nobel Prize winner Elias Canetti. With little distinction made between the stage and audience, it begins in near darkness where one can barely make out the faces of others. It is then that the audience encounters the performers who are painted totally black. Even though the performers are from Brazil, Holland and Japan, one is unable to differentiate one from the other as they merge en masse with the audience. Evelin's aggression and intelligence cast an acute inquiry toward the chaos of contemporary society. An immersive theatrical experience beyond audiovisual recognition awaits.

クリエーションメンバー: アンドレ=リーン・ジッゼ、ダニエル・バラ、エリエルソン・パチエコ、長洲仁美、ジェル・カローネ、ルス=ファン=デル・ブリット、マルセロ・エヴェリン、マルシオ・ノナト、レジーナ・ヴェロソ、ロサンジェラ・スリダーデ、セルジオ・カッター、瀧口翔、タマル・ブロム、ヴィルフレド・ローブストラ  
製作: デモリション Inc.  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT、クンステンフェスティバルデザール、パノラマ・フェスティバル  
助成: 公益財団法人セゾン文化財団  
主催: KYOTO EXPERIMENT

By & with: Andrez Lean Ghizze, Daniel Barra, Elielson Pacheco, Hitomi Nagasu, Jell Carone, Loes Van der Pliigt, Marcelo Evelin, Márcio Nonato, Regina Veloso, Rosângela Sulidade, Sérgio Caddah, Sho Takiguchi, Tamar Blom, Wilfred Loopstra  
Production: Demolition Inc. (Teresina)  
Co-production: Kyoto Experiment with support of the Saison Foundation, Kunstenfestivaldesarts (Brussels), Panorama Festival (Rio de Janeiro)  
Presented by Kyoto Experiment  
This project was awarded by Fundação Nacional de Artes - Funarte with Prêmio Funarte de Dança Klauss Vianna 2011

photo: Sérgio Caddah

## マルセロ・エヴェリン

振付家、研究者の顔を併せもつマルセロ・エヴェリンは、1986年からヨーロッパで活躍。ダンス作品に加え、様々な国のアーティストと共同制作を行い、音楽、映像、インスタレーションや、特定の場所を占拠するといった、様々なプロジェクトを展開している。デモリション Inc.を率いるインディペンデントのクリエイターとして、アムステルダム美術専門学校でインプロヴィゼーションや振付を指導する他、プロジェクトを立ち上げ、その生徒たちを制作に参加させている。ヨーロッパをはじめとする、アメリカ、アフリカ、日本、南米およびブラジルといった世界各国でワークショップや共同プロジェクトを手がけ、2006年からはアムステルダムと彼の出身であるブラジル・ピアウイ州のテレジナを歩き来し、パフォーマンス集団「ヌクレオ・ド・ディルソル」と共に今日のパフォーマンス・アーツについてのリサーチと制作を行っている。近作『マタドウロ(屠場)』(2010)および『突然どこもかしこも黒山の人だかりとなる』(2012)は、ブラジルおよび国外でも発表されている。

### Marcelo EVELIN

Born in Piauí, choreographer, researcher and performer. Lives and works in Amsterdam and Teresina. In Europe since 1986, works with dance collaborating with artists from different languages, also involving physical theater, music, video, installation and site-specific. Evelin is an independent creator with his company Demolition Inc., and teaches at the Mime School in Amsterdam, The Netherlands, where he also guide students in their creative processes. He coordinates workshops and collaborative projects in various countries of Europe, America, Africa, Japan, South America and Brazil, where he returned in 2006 and since then has been working also as a curator, as well as coordinating Teresina, Piauí, the Núcleo do Dirceu, a collective of artists and a platform of independent research and development for the contemporary performing arts. His last two shows, *Matadouro* (2010) and *De repente fica tudo preto de gente* (2012) are currently being shown in theaters and festivals in Brazil and abroad.



photo: Sérgio Caddah

## REVIEW

### 狂気と官能のエネルギー

観客は薄暗がりの中、一種リングのような場所の真中に置かれ、一時間の間座らず自由に場所を徘徊できる。その間、体中を黒く塗った男女7人、糸まともぬダンサーたちは端から端へ観客にぶつかりそうになりながら動きまわり、宗教的なダンスを始める。シャーマン教の儀式の夜。私達はそれを見物する野次馬だ。はじめは全員で抱き合い、ひとかたまりになって飛び跳ねながら、次に走りながら進んでいく。しばらくすると、地面に身を投げ出し積み重なって一つの山になる。ダンサーたちの息遣いだけが聞こえる。観客の私達はその都度、接触を求めてくるように見えるダンサーたちを避けて移動しなければならない。

そして、この地面に積み重なった一団は感動的な瞬間を迎える——絡み合った身体はいまや一つの大きな体躯となり、脚や腕が次々と“生えて”地面を這い、向きを変える。それはまるで見事なまでに美しく、官能的なヒュドラ(水蛇の怪物)のようだ。私達は身を乗り出してこの大きな美しい体躯を眺め感嘆のため息をもらす。それはラオコーンやカルポー、あるいはジェフ・ランポーの古典的彫刻のように美しく、ゴヤの絵の黒のように黒く、共同墓穴の山積みになった亡骸のように悲劇的である。

そして、ダンサーたちは再び立ち上がる。この上もない優しさに満ちた動作で、あるいはがやがやと喧嘩をするような身ぶり。ダンサーたちが集塊を解く時、一人ずつが観客の方へ向かって進んでくる。視線を交わし、受け止めてくれる者を探しながら。彼らの顔のない身体を見たあとでは、闇の中であまりにも近くにも印象的なその顔を見つめ、ぎらぎらとした目の輝きを受け止めるのはなんと強烈な体験である。

ギイ・デュブラ、マリー・ボーデ

『ラ・リーブル・ベルジック紙』(2013年5月21日付)より抜粋

### Power of Insanity and Sensuality

The audience is situated in the middle of a ring-like space in the dark. One can walk around the space freely for about an hour, while 7 naked dancers, painted entirely in black, are also moving around, nearly bumping into the audience. At some point, they start performing a religious-like dance like a Shamanic ritual and we are the witnesses to it. They embrace each other in the beginning then start running after jumping around as a mass. After a while, they throw themselves into a pile on the ground. We can only hear the sound of their breathing. The audience has to be careful with each step, avoiding these dancers who seem to be seeking contact.

There is then a breathtaking moment when the entangled bodies begin forming one giant body. With its growing legs and arms, it can crawl and change directions. It is amazingly beautiful and looks almost like a sensual Hydra. Audience members leaning out to see the mass of bodies can feel it is as beautiful as the classical sculpture of Laocoon, Carpeaux and Jef Lambeaux, as black as the paintings of Goya, and as tragic as bodies piled in a cemetery.

The dancers rise again, some with extremely angelic movements, other arguing. When the mass is dismantled, each dancer starts walking toward the audience. Using eye contact, they look for someone who will accept them. After witnessing the large faceless lump, looking into the goggling eyes in the darkness is an intense experience.

Guy Duplat and Marie Baudet, *La Libre Belgique* May 21, 2013

# 庭劇団ペニノ

niwagekidan penino

TOKYO

## 大きなトランクの中の箱

Box In The Big Trunk

🕒 90 min (新作 | 関西初演 / New Creation | Kansai Premiere)

10/3 (Thu) 19:30-  
10/4 (Fri) 19:30-  
10/5 (Sat) 14:00-□, 18:00-  
10/6 (Sun) 14:00-, 18:00-  
10/7 (Mon) 19:30-  
10/8 (Tue) 19:00-

\*開場は開演の15分前  
\*英語字幕あり  
\*The theater opens 15 min. prior to the performance.  
\*Performed in Japanese with English Subtitles.

□ ポスト・パフォーマンス・トーク タニノクロウ×鴻英良(演劇批評家)  
Post-performance Talk Kuro Tanino × Hidenaga Otori (Theater Critic)

驚愕の舞台美術とともに、異様で猥雑な妄想の扉が開く。  
ただし、それは(あなた)自身の妄想かもしれない…

With breathtaking stage art, a doorway to bizarre and obscene delusions opens.  
It could be a door to “your” delusion …

庭劇団ペニノ主宰のタニノクロウは、かつて自身が住んでいた東京・青山のマンションの一室を、時間と手間を惜しみなく費やし劇団のアトリエへと改装。「はこぶね」と名付けられた極めてプライベートかつミニマムな空間で、異様で猥雑、そして愛らしい妄想ファンタジーを繰り広げてきた。そんな「はこぶね」が新作を携えて、ついに外の世界へと出航した！本作は、2004年から4年ごとに「はこぶね」で立ち上がった作品『小さなリンボのレストラン』『苛々する大人の絵本』『誰も知らない貴方の部屋』を下地にする。不穏な妄想がうずまく奇妙な世界を舞台上の〈現実〉に出現させ話題を呼んだこれらの3作品をひとつの〈箱〉にぎゅっと詰めこみ、新しい作品に仕立て上げた、贅沢でぶっ飛んだ企画。また、それらの作品世界を縦横に展開させる、驚異的な舞台装置も見ものだ。3+1の世界／空間を行き来する無限のループは、醒めない夢の中にあるような、恐怖と愉悅にどっぷりと浸かる体験となるだろう。庭劇団ペニノ流『不思議の国のアリス』ともいえる、『大きなトランクの中の箱』。その舞台はきっと、生々しくて、切実で、愛おしい。

Kuro Tanino, the director of Niwagekidan Penino, took lavish time and care, renovating his apartment in Aoyama, Tokyo into the company's studio. Naming the extremely intimate and minimalist space "ARK", Niwagekidan Penino has produced bizarre and bawdy yet enchanting fantasies. The ark finally sets sail for the outside world with their new work! *Box In The Big Trunk* is based on the company's three previous works: *A Small Restaurant in "Limbo"* (2004), *Frustrating Picture Book for Adults* (2008), *The Room, Nobody Knows* (2012), all of which brought to the stage a strange world of restless delusion. Stuffing the 3 sensational works into one box, this work boldly tailors them into a new piece and the breathtaking stage art makes the bizarre world evolve in every direction. The world of the three+one works loops infinitely, immersing the audience in terror and pleasure as if in an inescapable dreamscape. At once compelling and enchanting, *Box In The Big Trunk* is Niwagekidan Penino's *Alice in Wonderland*.

元・立誠小学校 講堂  
Former Rissei  
Elementary School Auditorium

🕒 未就学児入場不可。  
開演後は入場不可。

Children under school age are not accepted into the theatre.  
No entry after the performance starts.

作・演出: タニノクロウ  
出演: 山田伊久磨、飯田一期、島田桃依(青年団)、瀬口タエコ  
構成: 玉置潤一郎、山口有紀子、吉野万里雄  
美術: 稲田美智子  
特殊小道具: 横沢紅太郎、小此木謙一郎(GaRP)  
舞台監督: 三津久  
照明: 阿部将之(LICKT-ER)  
音響: 佐藤こうじ(Sugar Sound)  
音楽: 奥田祐  
音響オペレーター: 阿久津未歩  
英語字幕: ウィリアム・アンドリュース、門田美和  
演出助手: 松本ゆい、仮屋浩太郎  
制作: 小野塚央  
製作: 庭劇団ペニノ  
助成: 公益財団法人セゾン文化財団  
共催: 立誠・文化のまち運営委員会  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Playwriting & direction: Kuro Tanino  
Cast: Ikuma Yamada, Ichigo Iida, Momoi Shimada (Seinendan), Taeko Seguchi  
Concept: Junichiro Tamaki, Yukiko Yamaguchi, Mario Yoshino  
Stage design: Michiko Inada  
Props: Kotaro Yokosawa, Kenichiro Okonogi (GaRP)  
Stage manager: Hisashi Mitsu  
Lighting: Masayuki Abe (LICKT-ER)  
Sound: Koji Sato (Sugar Sound)  
Music: Yu Okuda  
Sound operation: Miho Akutsu  
English subtitles: William Andrews, Miwa Monden  
Assistant director: Yui Matsumoto, Hirotaro Kariya  
Production: Niwagekidan Penino  
Production coordinator: Chika Onozuka  
Supported by The Saison Foundation  
Co-presented by Rissei Cultural City Steering Committee  
Presented by Kyoto Experiment

## 庭劇団ペニノ

タニノクロウを中心に昭和大学医学部在学中に同大学演劇部のメンバーで2000年に結成。以降、タニノが全作品の脚本・演出を手掛ける。『笑顔の砦』(2007)、『星影のJr.』(2008)が、2年連続で岸田國士戯曲賞最終候補にノミネートされた。近年では、劇団アトリエ「はこぶね」公演『苛々する大人の絵本』(2008)は、2009年以降、HAU Hebbel am Ufer、チューリヒ・テアター・シュベクターケル、ノールデルゾン舞台芸術フェスティバル(オランダ)、ネクストフェスティバル(ベルギー)、ドイツ・ミュンスターKulturschiene(2011)にて上演。また2012年には、アンスティチュ・フランセ東京・庭劇団ペニノ・あうるすぽっと共同企画『ちいさなブリ・ミロの大きな冒険』を公演し、今までと違ったペニノの一面を見せて好評を博した。

<http://www.niwagekidan.org>

## Niwagekidan Penino

Founded in 2000 by Kuro Tanino and the members of the drama club at Showa University School of Medicine. Tanino has since written and directed all of the company's works. *Fortress of Smile* (2007) and *Star-shadow Jr.* (2008) were consecutively nominated for the Kishida Kunio Drama Award. In recent years its *Picture Book for Irritated Adults* (2008) has been performed at HAU Hebbel am Ufer in Berlin (2009), Theaterspektakl in Switzerland, and Norderzone in Holland (2013), as well as at Nextfestival in Belgium and in Munster, Germany (2011). In 2012, the company presented a new facet by performing *Bouli Miro* which was coproduced by Institut français Tokyo, Niwagekidan Penino and OWL SPOT.



photo: Aki Tanaka

## INTRODUCTION

### 妄想を肯定する!?

—庭劇団ペニノ『大きなトランクの中の箱』への誘い—

妄想を抑圧すること、それは正常人にはつねに要請されているものであるが、妄想を抑圧することは必ずしも必要なのではないのか、このような確信にたどり着いた一人の人間がいたとして、そしてこの人間が、精神分析医であり、かつ、演出家であったとすると、どのような演劇が出現するのか、そのことを知りたければ、『大きなトランクの中の箱』を見に来るといいのではないのかと私は思う。

奇妙な妄想がある。この舞台ではそうした妄想が徹底的に肯定されている。そのことが徐々に明らかになり、われわれ観客もその肯定性にうなづくことになるというそのプロセスが現実化していくのだ。

しかし、この妄想は、思いつめた人間の妄想がしばしばそうであるように、単調でも通り一遍なものでもない。その妄想の多様こそが、この舞台を、ある種の妄想賛歌に仕立て上げているのである。なぜこのようなひとつの空間からあのようなそれとはきわめて異質な空間へと人は歩みこんでいくのか。この舞台にある妄想のそのような移行の無限の転換の連なりの中に、私は、人間の変容の可能性を、あるいは、生の様式の多様性への確信を見出すのである。

AからBへ、そしてBからCへ、さらにCからDへ、この移行は無限に続くであろうが、そうしたことが、この舞台では、夢のなかでのように、容易に果たされる。それが舞台における空間的変容として現出するのを見ることは一種の愉悅である。そして、この愉悅とともに妄想の肯定は、疑問に付されつつ現実化していくのである。

しかし、問題はそのような視覚的な快樂だけにこの舞台を還元してはならないだろうということだ。

この主張が何を意味するのかについての簡単な示唆をすることで、この文章を終えようと思う。つまり、こういうことである。アントナン・アルトーの有名な著作に『演劇とその分身』というのがある。われわれは演劇を見る。舞台上で展開されているそれは、現実的な出来事の連なりだったりする。だが、その出来事、現実の再現でしかないものあたりに、現実のレベルを遙かに超えたその分身が、精霊のように漂っている。それが見えるか、と、アルトーは問いかけたのである。タニノクロウの『大きなトランクの中の箱』を見ながら、何を、そのあたりに漂う精霊として眼差ささなければならぬか、それが問題なのである。

### 鴻英良

1948年生まれ。演劇批評家。専門はロシア芸術思想。ウォーカー・アート・センター・グローバル委員、国際演劇祭ラオコオン芸術監督、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター副所長を歴任。著書に『二十世紀劇場——歴史としての芸術と世界』(朝日新聞社、1998)、共著に『反響マシーン——リチャード・フォアマンの世界』(勤草書房、2000)他。訳書にカントールの『芸術家よ、くたばれ!』(作品社、1990)、タルコフスキー『映像のボエジア』(キネマ旬報社、1988)など多数。

### Affirm Delusion!?

—Introduction to *Box In The Big Trunk* by Niwagekidan Penino —

Ordinary people are required to suppress their little delusions. But suppose one person comes to believe you don't necessarily have to do that and if he happened to be both a psychiatrist and stage director, what kind of theater would he produce? If you want to know the answer, I recommend watching *Box In The Big Trunk* by Niwagekidan Penino.

There are some bizarre delusions out there. And the work thoroughly affirms and embraces such delusions. This gradually becomes clear as the performance progresses and the audience is caught up in the process, finally coming to accept the affirmation. Unlike those of a tormented mind, which are often monotonous and repetitive, delusions on this stage are characterized by their diversity. It is this diversity that makes this performance a kind of celebration of delusion. Now, why do we want to step out of one world of delusion into another? I find that the infinite chain of delusions in this work illustrates the possibility for human transformation and confidence in the diversity of lifestyles.

From A to B, B to C and C to D. The shift may go on forever but it is accomplished easily in this work, as if in a dream. Being able to see such transformation of space live on stage is quite joyful. With this elevated sense of joy, we become open and affirmative to the delusion.

However, we shouldn't talk about this work only in the context of such visual sensation.

Antonin Artaud once wrote in *The Theatre and Its Double* that we, an audience, watch theater play out. What's going on the stage can be a series of ordinary events. But around such events, the reenactment of real life floats the double like a spirit, which transcends the reality itself. In the book, Artaud questions whether or not we can see the doubles. When watching Kuro Tanino's *Box In The Big Trunk*, what we see as the double, the drifting spirit is indeed the question.

### Hidenaga OTORI

Born in 1948. Theater critic, specializing in the history of ideas in Russian art. He has held positions as a member of the Global Advisory Committee of the Walker Art Center, as artistic director of the international theatre festival "Laookon" (Hamburg, Germany), and vice president of Kyoto Performing Arts Center. Author of *The 20th Century's Polyphonic Theater: the Arts and the Worlds as a History* (1998), *Reverberation Machines: The Words of Richard Foreman* (2000) and others. Among many other works he has translated books by Tadeusz Kantor and Andrei Tarkovsky into Japanese.

※テキストの全文は、KYOTO EXPERIMENT公式ウェブサイトでご覧いただけます。

# 木ノ下歌舞伎

h n h sth fifta-h a h ufffi

KYOTO



photo: Takashi Horikawa design: Shiro Amano

## 木ノ下歌舞伎ミュージアム“SAMBASO” ～バババツとわかる三番叟～

Kinoshita-Kabuki Museum “SAMBASO”

🕒 120 min (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 10/12 (Sat) 15:00- , 19:00-  
10/13 (Sun) 13:00- , 17:00-

\*開場は開演の30分前

\*The theater opens 30 min.  
prior to the performance.

木ノ下歌舞伎による、見たこともない(動く)博物館。  
敬して遠ざけない、古典芸能の遊びかた。

Extraordinary “Moving” museum by Kinoshita-Kabuki  
A way to enjoy classical theater while maintaining a respectful closeness.

京都を拠点に、歌舞伎の演目を現代の視点で捉え直してきた木ノ下歌舞伎。『義経千本桜』『勸進帳』『菅原伝授手習鑑』といったおなじみの演目から、『摂州合邦辻』などで名を残す浄瑠璃作者・菅専助をクローズアップした連続企画まで、主宰・木ノ下裕一の指針に基づいて、演目ごとにさまざまな演出家を起用しながら上演を果たしてきた。『三番叟』は、2008、12年にも、木ノ下裕一監修、杉原邦生演出で上演され、2013年には海外公演も実現した人気のダンス作品。再演することに更新を続けて、木ノ下歌舞伎の躍進を計る格好の演目になっている。さらに今回は、『三番叟』の歴史をたどる関連展示、狂言師・茂山童司の舞も組み合わせるといふ、劇場全体を使ったツアー形式で体感できるスペシャルな企画。能狂言から歌舞伎へと受け継がれ、発展してきた『三番叟』は日本芸能を象徴する神事的な演目。その祝祭性はそのままに、木ノ下歌舞伎がSAMBASOの歴史に新たな1ページを書き加える。

This Kyoto based company aims to explore new understandings of Kabuki. From the famous repertoires such as *Yoshitsune Sembon-zakura*, *Kanjincho* and *Sugawara Denju Tenarai Kagami* to a series of projects on Sensuke Suga, a Joruri legend who produced *Sesshu Gappougatsujii*, the company collaborates and produces works with different directors under the supervision of Yuichi Kinoshita. Their *Sambaso* (directed by Kunio Sugihara, supervised by Yuichi Kinoshita) was shown in 2008 and 2012 and performed overseas in 2013. The company continues to push the envelope by refining and updating the piece every time they perform it. *Sambaso* has become one of their major works. For this year's Kyoto Experiment, it will be presented together with the Kyogen version of *Sambaso* by Doji Shigeyama and the exhibition, tracing the history of *Sambaso*. The installation takes place throughout whole theater space and the audience can interactively “experience” *Sambaso*. Evolving from the Noh repertoire to Kabuki, *Sambaso* was originally more of a festive ritual than a performance. Keeping this sense of festivity, Kinoshita-Kabuki writes a new chapter in the history of *Sambaso*.

Lecture PERFORMANCE

京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza



13日13:00の回は未就学児もご入場可。  
保護者の膝上入場のみ無料。(お席が必要な場合、高校生以下料金となります)

Children are welcome to watch the performance  
on the 13th at 13:00.

監修: 木ノ下裕一  
総合演出: 杉原邦生  
特別出演: 茂山童司  
照明: 魚森理恵、檜木順子  
音響: 齋藤学  
映像: 須藤崇規  
衣装: 清川敦子  
演出部: 楠海緒  
舞台監督: 大鹿展明  
宣伝写真: 堀川高志  
宣伝美術: 天野史朗  
制作: 本郷麻衣  
製作: 木ノ下歌舞伎  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT

木ノ下歌舞伎『三番叟』  
原案・監修: 木ノ下裕一  
演出・美術: 杉原邦生  
出演: 芦谷康介、京極朋彦、竹内英明

主催: KYOTO EXPERIMENT

Supervisor: Yuichi Kinoshita  
General direction: Kunio Sugihara  
Guest performer: Doji Shigeyama  
Lighting: Rie Uomori, Junko Hinoki  
Sound: Manabu Saito  
Video: Takaki Sudo  
Costume: Atsuko Kiyokawa  
Assistant director: Mio Kusunoki  
Stage manager: Nobuaki Oshika  
Advertising photo: Takashi Horikawa  
Advertising art: Shiro Amano  
Production coordinator: Mai Hongo  
Production: Kinoshita-Kabuki  
Co-production: Kyoto Experiment

Kinoshita-Kabuki *SAMBASO*  
Supervisor: Yuichi Kinoshita  
Direction & stage design: Kunio Sugihara  
Performer: Kosuke Ashiya, Tomohiko Kyogoku, Hideaki Takeuchi

Presented by Kyoto Experiment

## 木ノ下歌舞伎

歴史的な文脈を踏まえた上で現行の歌舞伎にとらわれず新たな切り口から歌舞伎の演目を上演する団体。古典演劇と同時代の舞台芸術がどのように相乗作用しうるかを探究し、新たな古典観と方法論を発信、ムーブメントの惹起を企図する。あらゆる視点から歌舞伎にアプローチするため、主宰である木ノ下裕一が指針を示しながら、さまざまな演出家による作品を上演するという体制で、京都を中心に2006年より活動を展開している。2010年より、京都と横浜の2都市を股に掛けた滞在制作企画「京都×横浜プロジェクト」を3年間にわたって展開。同プロジェクトによって制作された『勸進帳』（演出：杉原邦生、2010）、『夏祭浪花鑑』（演出：白神ももこ、2011）、『義経千本桜』（総合演出・演出：多田淳之介、演出：白神ももこ・杉原邦生、2012）の3作品は大きな反響を呼んだ。最新作『黒塚』（急な坂スタジオプロデュース、演出：杉原邦生、2013）にてCoRich舞台芸術まつり! 2013春グランプリを受賞。

<http://kinoshita-kabuki.org>

### Kinoshita-Kabuki

Founded in 2006, the Kyoto based company aims to explore new understandings of classics and to initiate a new movement through Kabuki repertoire with a fresh dimension and historical context in mind. In order to approach Kabuki from every possible angle, the company collaborates and produces works with various directors under the supervision of Yuichi Kinoshita. This is the third year for their “Kyoto x Yokohama Project”, a residency program between Kyoto and Yokohama since 2010. *Kanjincho* (directed by Kunio Sugihara, 2010), *Natsumatsuri Naniwa Kagami* (directed by Momoko Shiraga, 2011) and *Yoshitsune Sembon-zakura* (General Director: Junnosuke Tada, directed by Junnosuke Tada, Momoko Shiraga and Kunio Sugihara, 2012) are the outcomes of the program and they have all been very well received by the public. The company's last piece *Kurozuka* (produced by Steep Slope Studio, directed by Kunio Sugihara, 2013) won the Grand Prix at the CoRich performing arts Festival 2013 Spring.



photo: Ryushiro Suzuki

木ノ下歌舞伎『三番叟』 / Kinoshita-Kabuki *Sambaso*

## INTRODUCTION

### 木ノ下歌舞伎の意義

木ノ下歌舞伎は、日本の古典劇の一つである歌舞伎を現代の演劇として再創造する試みである。たとえばその試みのもっとも成功した『三番叟』。もともと『三番叟』は、日本の四つの古典劇一能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎のすべてにおいて、そのプログラム冒頭において必ず上演される儀式劇である。この伝統は遠く能に始まって今日に及び、日本の古典劇が神に奉げられるものであることを象徴している。木ノ下歌舞伎は、その象徴の構造を一つのドラマとして描いた。すなわち神の言葉が人間に伝えられ、それを伝えることによってその人間が権力者になり、その権力者はその伝達によって民衆を統治し、その末端の私たちの家庭を支配し、かつ保証する構造をドラマとして描いた。これは単に『三番叟』の再創造であるばかりでなく、日本の社会の構造の鋭い暴露と批判であった。木ノ下歌舞伎は単に古典の再創造であるばかりでなく、すぐれた現代の演劇なのである。

#### 渡辺保

1936年生まれ。演劇評論家、放送大学客員教授。『四代目市川團十郎』で芸術選奨文部大臣賞、『黙阿弥の明治維新』で読売文学賞を受賞。その他著書多数。

### 木ノ下歌舞伎ということ

大学生が同好会的に歌舞伎の真似事をするということは、半世紀以上前の学生の間でも存在した。しかしその頃は、十五世羽左衛門は戦争中に亡くなって観ることは出来なくても、六代目菊五郎も初代吉右衛門も、七世幸四郎も健在であったし、戦後の混乱の中でも、歌舞伎には、能狂言や文楽とは違った意味ではあれ、規範というものがあつたように思う。そういう状況の中では、学生のクラブ活動としての歌舞伎などというものは、お道楽の域にすら達していないものであつた。そもそも、俳優座研究所では、千田是也氏が、歌舞伎など見るのは許しがたいことだと宣言していたし、後に俳優座が『四谷怪談』の通しに挑戦するようなことは、想像もつかなかつた。

こうした禁忌を打ち壊したのは、言うまでもなく小劇場運動の第一世代であつたし、木ノ下裕一が主宰する彼の名を冠した「歌舞伎」も、その系譜にある。芝居をやろうという奴が、大学なんぞに居ることはないと言つた、新劇・小劇場的「蕃カラ」は、もういい加減に捨てたほうがよい。木ノ下歌舞伎に期待されることは、当人たちの意識する以上に大きいと言わねばならない。

#### 渡邊守章

1933年生まれ。東京大学名誉教授、京都造形芸術大学教授、舞台芸術研究センター所長。専攻は日本文学・表象文化論。演出家。著書多数。能・狂言にも詳しい。

### The significance of Kinoshita-Kabuki

Kinoshita-Kabuki is an attempt to recreate Kabuki, one of Japan's traditional performing arts, into contemporary theater. *Sambaso* is a great example of this attempt. Originally, *Sambaso* was a ceremonial repertoire performed at the beginning of all the four Japanese traditional performing arts: Noh, Kyogen, Joruri puppet theater and Kabuki. This tradition, starting from ancient Noh, comes down to us today and symbolizes how Japanese traditional theater forms are all tributes to the gods. Kinoshita-Kabuki depicts the structure of this symbolism as a drama. It illustrates how the words of the gods are transmitted to humanity, and by receiving these words, one person becomes an authority. As an intermediary between the gods and humanity, that person then governs others; ruling over, yet at the same time securing our lives. It is not only a reproduction of *Sambaso*, but also an acute uncovering and criticism of the social structure of Japan. Kinoshita-Kabuki, beyond a mere re-creation of tradition, is a master of contemporary theater.

#### Tamotsu WATANABE

Born in 1936. Theater Critic and Visiting professor at The Open University of Japan. Awarded the Minister of Education Award for Fine Arts with *Yondaime Ichikawa Danjuro* and the Yomiuri Prize for Literature with *Mokuami no Meiji Ishin*. Author of many publications.

### About Kinoshita-Kabuki

It is not rare for university students to choose Kabuki as a club activity. Students more than half a century ago did so as well. Though the 15th Uzaemon died during the war and we could no longer see his performance it was still a time when the 6th Kikugoro and the first Kichieemon as well as the 7th Koshiro were all active in the scene. Despite the great turmoil of the postwar period, Kabuki had its own norms, which were different from those of Nohgaku and puppet theater. It was a time when student Kabuki was not even considered amateur theater. Korenari Senda from Haiyuza Theater Company even declared that Kabuki was not to be watched. No one then could have imagined that the Haiyuza company itself would later perform *Yotsuya Kaidan*. The ones who shattered this taboo were of course, the first generation of the underground theater movement. Kinoshita-Kabuki, a “Kabuki” named after Yuichi Kinoshita, is in a way part of this movement. I think it's about a time we discard the bohemian ideas of Shingeki (Japanese modern theater) and underground theater, the notion that those who want to be in theater don't need to go to university. What Kinoshita-Kabuki embodies is indeed much bigger than they themselves recognize.

#### Moriaki WATANABE

Born in 1933. Professor emeritus at the University of Tokyo, Professor at Kyoto University of Art and Design, Director of Kyoto Performing Arts Center. Specialist in French literature and study of culture and representation. Author of many publications. Also an authority on Noh and Kyogen.

# She She Pop

BERLIN



photo: Benjamin Krieg

## シュプラーデン(引き出し)

Drawers

🕒 120 min (日本初演 | Japan Premiere)

📅 10/18(Fri) 19:30-  
 10/19(Sat) 16:00-  
 10/20(Sun) 16:00-

\*開場は開演の10分前  
 \*日本語・英語字幕あり  
 \*The theater opens 10 min. prior to the performance.  
 \*Performed in German with Japanese and English subtitles.

📖 ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance Talk

🔗 関連イベント 上映会「映画でみる東ドイツ」  
 Related Event Screening "Understanding East Germany through its films" →p.62

個人の記憶、国家の歴史がポリフォニックに響きあう。  
 時代と社会状況をどん欲にとりこんだ、ドイツ発の話題作

Personal memories polyphonically echo with the history of nation.  
 High-profile work from Germany, passionately capturing our time and society.

近年ますます国際的な名声を高めるドイツの女性パフォーマンス集団、She She Pop。彼女たちにとって舞台とは、演劇というコミュニケーションの基本的な原理を探求することであり、メンバーそれぞれの個人的な経験、価値観に基づいて表現という様式に昇華させる場である。メンバーには演出家／脚本家／俳優といった特定の役割だけを担う者はおらず、作品は常に集団で制作されるというユニークなスタイルをとっている。そんな彼女たちの最新作『シュプラーデン(引き出し)』(原題:Schublade)は2012年、ベルリンのHAU劇場で初演。まさにそのベルリンが象徴的な場として現れる、東西ドイツの分断そして壁の崩壊という、過去約半世紀にわたるヨーロッパの大きな歴史をひもとく試みである。壁の両側で生まれた6人の女性が、それぞれの引き出しから手紙、日記、写真、そしてレコードなどを取り出しながら、それを語り、ときに笑い飛ばし、ときに歌い踊りながら記憶を辿る。人生の物語を深く紡ぎながら、それらの自伝的な素材は、2つのドイツの間に生まれたイデオロギー的断絶を露わにし、日本の観客にもアクチュアルに響くだろう。なお本作の上演後、メンバーは、京都芸術センターのアーティスト・イン・レジデンスプログラムでそのまま京都に滞在、次回作のリサーチを行い、再びKYOTO EXPERIMENTに戻ってくる予定である。

She She Pop is a female performance collective from Germany that is gaining more and more attention on the international scene. They see their mission as exploring the social boundaries of communication - and transgressing them in a purposeful and artistic way in a protected theatrical space. They have a specific aesthetic and ideological profile. Their shows are developed as a collective. There is no director - and also no author or actors. Texts and concepts are developed together. Their theatrical approach is intellectual and humorous at the same time. *Drawers (Schublade)* is She She Pop's latest work and premiered in Berlin in 2012. The work looks at a half century of European history before and after the fall of the Berlin Wall. 3 East-born and 3 West-born performers search their memories / letters from drawers, excerpts from journals, and favorite records. They talk about, sometimes laugh at and other times dance with the history of the East-West German division. The ideological gap between the two countries, revealed by their personal stories, is sure to resonate with a Japanese audience. The company will stay in Kyoto for an artist's residency to research / create a new production, which will be shown at the upcoming Kyoto Experiment.

京都芸術センター 講堂  
 Kyoto Art Center Auditorium

コンセプト: She She Pop  
 クリエーションメンバー: ゼバ스티アン・パーク、ヨハンナ・フライブルク、バーバラ・グロナーウ、アネット・グレスチャー、ファニ・ハルンブルガー、アレクサンドラ・ラハマン、カタリーナ・ローレンツ、リーザ・ルカセン、ミーケ・マツケ、ベギー・メトラー、イリア・パバテオドル、ヴェンケ・ゼーマン、ペーリット・シュトゥンプフ、ニーナ・テケレンブルク  
 ドラマトゥルク協力: カーヤ・ヤクシュタット  
 コーディネーター: ヴェロニカ・シュタイニンガー  
 舞台美術: ザンドラ・フォックス  
 衣裳: レア・シュブシュ  
 照明: スヴエン・ニヒタライン  
 音響: フロリアン・フィッシャー  
 映像: ザンドラ・フォックス、ブランカ・パブロヴィッチ  
 アシスタント: アイリカ・ライボルト、アンヤ・ブレダイク  
 字幕: KITA / David Maß, 古後奈緒子  
 制作・広報: ehrliche arbeit  
 ツアーマネージャー: クシェニア・ライデル  
 カンパニーマネージャー: エルケ・ヴェーバー  
 製作: She She Pop  
 共同製作: HAU Hebbel am Ufer (ベルリン)、カンパナーゲル(ハンブルク)、FFT(デュッセルドルフ)、brut Wien  
 助成: ベルリン市、ハンブルク市、Rudolf Augstein財団、Darstellende Künste財団  
 特別協力: ドイツ文化センター  
 主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept: She She Pop  
 By & with: Sebastian Bark, Johanna Freyburger, Barbara Gronau, Annett Gröschner, Fanni Halmburger, Alexandra Lachmann, Katharina Lorenz, Lisa Lucasen, Mieke Matzke, Peggy Mädler, Ilija Papatheodorou, Wenke Seemann, Berit Stumpf & Nina Tecklenburg  
 Dramaturgical advice: Kaja Jakstat  
 Coordination & assistance: Veronika Steininger  
 Stage design: Sandra Fox  
 Costume: Lea Søvsø  
 Lighting: Sven Nichterlein  
 Sound: Florian Fischer  
 Video: Sandra Fox, Branka Pavlovic  
 Second assistant: Eilika Leibold, Anja Predeick  
 Subtitles & Translation: KITA / David Maß, Naoko Kogo  
 Production Manager & PR: ehrliche arbeit  
 Tour management: Xenia Leydel  
 Company management: Elke Weber  
 Production: She She Pop  
 Co-production: HAU Hebbel am Ufer (Berlin), Kampnagel (Hamburg), FFT (Düsseldorf), brut Wien  
 Funded by City of Berlin, City of Hamburg, Rudolf Augstein Foundation, Fonds Darstellende Künste  
 Supported by Goethe-Institut  
 Presented by Kyoto Experiment



## She She Pop

1998年、ギーセン大学応用演劇学科専攻の卒業生によって結成される。女性パフォーマンス集団として活躍するShe She Popのオリジナルメンバーは、ベルリンとハンブルクに在住のゼバスティアン・バーク、ヨハンナ・フライブルク、ファニ・ハルンバーガー、リーザ・ルカセン、ミーケ・マツケ、イリア・パパテオドル、ベリット・シュトゥンプフ。レパートリー劇団の持つ既存のヒエラルキーから飛び出して、集団的な作品制作と上演を行う。作品進行上の重要な要素として、観客を巻き込むことで知られている。2010年には、『リア王』を脚色した『TESTAMENT (遺言／誓約)』で Favoriten フェスティバル Wild-Card 賞を受賞。2011年には Impulse フェスティバルでゲーテ・インスティトゥート賞を受賞。

<http://www.sheshipop.de>

## She She Pop

Founded in 1998 by graduates of the Gießen Institute for Applied Theatre Studies. The permanent members of this originally women-only performance collective—Johanna Freiburg, Fanni Halmburger, Lisa Lucassen, Mieke Matzke, Ilia Papatheodorou, Berit Stumpf and Sebastian Bark—live in Berlin and Hamburg. The artists who are She She Pop work outside the hierarchical structures of repertory theatre; they develop and perform their productions as a collective. The group's trademark is the strong involvement of the audience as a force that helps to shape the course of their performances.

2010 they receive "Wild-Card" prize of the festival Favoriten for their Lear-adaptation *Testament* and in 2011 the prize of the Goethe-Institut at the festival "Impulse".



photo: Benjamin Kiegl

## REVIEW

### She She Popの自伝的作品

舞台上には3つのテーブルが置かれ、各テーブルには2人の女性が机を挟んで座っている。2人のうち1人は東ドイツ出身で、もう1人は西の出身だ。彼女たちはお互いの過去についてインタビューし合う。昔の記憶の引出しをかき直す中で、幼少期の思い出／初恋体験／自我の目覚め／音楽の趣味／性的な嗜好／金銭感覚などが、育った環境で同じだったり異なったりする様子を再確認していく。ところが、話が憧れのハイナー・ミュラーになったり、Ton Steine Scherbenの曲が流れてくると東西の壁はなくなり、内在的な結束があらわになる。6人の中年女優たちが、椅子をころがしながらリオ・ライザーの「Wir müssen hier raus」に合わせてヘッドバンギングする様子は、なかなか趣がある。

ともすれば説教的にもなりかねない東西ドイツのサミットという設定も、さすがHAUの手にかかれれば空虚なキャッチフレーズが飛び出すことはなく、例えば誰かの日記を読んだとき特有の恥ずかしさの様な、答えのない問いかけが発せられている。東ドイツの娘が西ドイツの元上流階級の娘に「正直に言って。あなたの両親は資本主義者でしょ？」と質問するといったクリシェも、面白おかしくエスカレートしていき、舞台は独特のユーモアを醸し出す。出演者たちは、互いに同等に差別しあうことの素直な可笑しさを求めて、自分をさらけ出すことに抵抗がない人たちなのでご心配なく。

『シュブラーデン(引き出し)』は、自分たちの父親を題材にして大ヒットした『TESTAMENT(遺言／誓約)』に続く、She She Popの自伝的作品シリーズのひとつと言えるだろう。ベルリンのアーティストたちの中には、アイデンティティーの問題を考えるにあたって、自己中心的ナルシズムに陥る者が多い。She She Popはそうした自惚れには走らず、さばさばとしたアイロニーでみる者に内省を促す。人生の断片を端的なエピソードに落としこむことで、メッセージ性が薄まる可能性はある。しかし、本作からあふれる陽気さは、その可能性さえも凌駕している。

ペーター・ラウデンバッハ  
『南ドイツ新聞』(2012年3月12日付)より抜粋

### She She Pop rummages in autobiographical "Compartments"

In this new piece by the performance collective She She Pop, the stage consists of mainly three tables. Two women – one from former East-Germany, one from the former West – sit across from each other at each table. They interview each other about their pasts and rummage around in the biographic compartments and drawers of memory only to discover once again how different or similar memories of childhood and first loves, self-definitions, tastes in music, sexual orientations or their relationships to money feel depending on what part of the country they grew up in. But once the group arrives at a veneration of Heiner Müller, so typical of such circles, and put on a record by the widely accepted band "Ton Steine Scherben", Germany's inner unity is restored. Watching six middle-age performers head-banging enthusiastically to Rio Reiser's "Wir müssen hier raus, wie leben im Zuchthaus...", while rolling across the stage on their chairs, has its own charm.

This German-German summit meeting could have become terribly didactic, but the HAU being what it is, this is no exchange of empty catchphrases, but rather open explorations, with all the embarrassments that diaries (for example) have to offer. When West-German upper-class degeneration clash with East-German question marks ("now be honest, are your parents capitalists?") and clichés merrily escalate, the situation develops its own idiosyncratic humor. Fortunately the performers are prone to voice their diagnoses with a candid joy for mutual discrimination ...

In *Schubladen*, She She Pop continue their series of autobiographical research projects, which has by now –after the enormous success of *Testament* together with their fathers – become a genre of its own. The self-centered interest in personal identity has a narcissistic streak that is typical for Berlin's creative class. But She She Pop is smart enough to avoid the pitfalls of vanity, by exhibiting these exercises on self-reflection with nonchalant irony. The tendency to partition life into short anecdotes and the limited degree of new insight gained by the audience is more than compensated for by the cheerfulness that the evening produces.

Peter Laudenbach, *Süddeutsche Zeitung*,  
March 12, 2012



photo: Yu Okamoto

## 家庭的 1.2.3

Domestic progress 1.2.3

🕒 100 min 〈新作 | 関西初演 / New Creation | Kansai Premiere〉

📅 10/19(Sat) 13:30-📍, 19:00-  
10/20(Sun) 13:30-📍

\*開場は開演の15分前

\*The theater opens 15 min. prior to the performance.

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance Talk

📍 関連イベント Baobabダンスワークショップ  
Related Event Baobab Dance Workshop →p62

観客席まで席卷する、圧倒的な熱量。

日常の身体を飛び出し、シンプルな身体のドラマを描く

Overwhelming heat from the stage swallows the audience.  
A drama about the body beyond its mundane physicality.

2010年京都での『純白のスープ皿の完璧な配置』が実質的な旗揚げ公演となり、2011年『Relax★-KYOTO-』、2012年『～飛来・着陸・オードブル～』と、3年連続でKYOTO EXPERIMENT フリンジ企画に参加してきたBaobabが、満を持して公式プログラムに初登場する。全作品の振付、構成、演出を務める主宰の北尾亘をはじめ、目澤美裕子、米田沙織というカンパニーメンバーは桜美林大学の同窓生。ここにダンサー、役者、その他、さまざまな人材を公演ごとに集めるというスタイルをとる。ダンスの本質的な楽しさを隠さないポジティブな舞台は、昨年のトヨタコレオグラフィアワードで北尾がオーディエンス賞を受賞するなど、多くの観客を魅了している。彼ら自身が培おうとしてきた「生き抜くための〈筋力〉」は、まさに直感的かつ知的な振付・構成へと形を成し、大いに客席を沸かせてきた。人間が生まれ落ちてから社会で成長する中で獲得してきたプロセスを内包した、いわゆる日常の身振り、身体を足がかりに、1、2、3と跳躍して、圧倒的なフィクションとしての身体へ。そんな意味を含んだタイトルの新作は、Baobabらしい大胆に練られた展開が期待される。第2の故郷ともいえる京都で、今夏の滞在制作を経て、彼らはどこまで飛躍するのか。

After introducing the company's first piece, *The perfect layout of the pure-white soup plate*, in 2010, Baobab has shown *-Relax KYOTO-* in 2011 and *~come flying-landing-hors d'oeuvre-* in 2012 at Kyoto Experiment's fringe program. This is their long-awaited debut in the official program. Company members, Wataru Kitao, who conceptualizes, choreographs and directs all the work, Fuyuko Mezawa and Saori Yoneda are all J.F. Oberlin University alumni. They collaborate with other dancers, actors and other talents on a project-basis. Making no secret of the essential joy of dance, Kitao's positive performance has won the Audience Award at Toyota Choreography Award 2012 and attracted a large audience. Their motto is to develop "muscle for survival". It has formed into an instinctive yet intellectual choreography and performance. Using our ordinary bodies, retaining the human developmental process, as a foothold, Baobab throws us into an overwhelming realm of the body. This new work fully showcases Baobab's bold concept. Having their residency in Kyoto over the summer, it is thrilling to see how far they will leap.

📍 元・立誠小学校 講堂

Former Rissei Elementary School Auditorium

振付・構成・演出: 北尾亘  
出演: 水越朋、岡本優 (TABATHA)、  
村田茜、内海正考、判治芳恵、鈴木綾香、  
小山まさし、山下彩子  
米田沙織、目澤美裕子、北尾亘  
映像ディレクション: みんなうそつき (西川  
達郎・乙女絵美)  
衣裳: 石野良子  
楽曲提供: 岡田太郎 (悪い芝居)  
宣伝美術: 岡本優 (TABATHA)  
制作: 目澤美裕子  
音響: 宮田充規  
照明: 川島玲也  
舞台監督: 石田昌也  
製作: Baobab  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
協賛: TOYOTA 創造空間プロジェクト  
助成: 公益財団法人アサヒグループ芸術  
文化財団  
共催: 立誠・文化のまち運営委員会  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Choreography & direction: Wataru Kitao  
Cast: Tomo Mizukoshi, Yu Okamoto  
(TABATHA), Akane Murata, Masataka  
Uchiumi, Yoshie Hanji, Ayaka Suzuki, Ken  
Oishi (monophonic orchestra), Masashi  
Koyama, Ayako Yamashita  
Wataru Kitao, Saori Yoneda, Fuyuko  
Mezawa  
Visual jockey: Minnausotsuki (Tatsuro  
Nishikawa, Emi Otome)  
Costume: Ryoko Ishino  
Music: Taro Okada (warui-shibai)  
Advertising art: Yu Okamoto (TABATHA)  
Production coordinator: Fuyuko Mezawa  
Sound: Mitsunori Miyata  
Lighting: Reiko Kawashima  
Stage manager: Masaya Ishida  
Production: Baobab  
Co-production: Kyoto Experiment  
Supported by Asahi Group Arts Founda-  
tion, TOYOTA Creation Space Project  
Co-presented by Rissei Cultural City  
Steering Committee  
Presented by Kyoto Experiment

## Baobab

2009年結成。主宰・北尾亘が全作品の振付・構成・演出を手掛ける。所属メンバーの目澤美裕子(制作/ダンサー)、米田沙織(ダンサー)と共に企画・運営を行う。ダンサーや役者の垣根を越えた人材を募り創作する、パフォーマンス性の強い作品を基盤とする。2012年よりD-inclineプロジェクトを始動し、身体性・抽象性に特化したクリエーションも模索する。その他、様々なフェスティバルに積極的に参加。パフォーマンスイベントの企画や、初心者向けワークショップの定期開催など、クリエーションのみならず活動の場を広げている。北尾はトヨタコレオグラフィーアワード2012オーディエンス賞受賞。コンドルズ振付コンペディション2010(CCC)アホウドリ賞(準グランプリ)受賞。

<http://dd-baobab-bb.boo.jp>

## Baobab

Wataru Kitao creates the overall concept, and is in charge of choreography and directions. Company members, Fuyuko Mezawa and Saori Yoneda runs administrative work with him. The company works with different talents from various genres for every piece and boldly empowers everyone, whether experienced or not, to dance. It has participated in performing arts festivals such as Kyoto Experiment Fringe Program and Komaba Agora Theater Summer Festival -PAN-. Baobab strives to promote the world of dance through organizing the performance event as well as various dance workshops for beginners. Kitao won the Audience Award at the Toyota Choreography Award 2012 and took second place at the CONDORS Choreography Competition 2010.



photo: Toahiro Shimizu

Relax ★-KYOTO-

## INTRODUCTION

### Baobabの新作に寄せて

今のコンテンポラリーダンス界は、取ったコンセプト馬鹿の作品よりも身体存在感を強く打ち出すスタイルが増えてきている。特に東日本大震災以降、「いまこの状況を生き抜く身体のリアル」を人々が求めているからかもしれない。

そうした中で、問答無用の迫力で迫るヒップホップをベースとしたダンスはひとつの流れを形成しつつある。だが重要なのは、アクロバティックな技を作品の中に組み入れることではない。たんなる技自慢になってはいかん。あくまでも要素のひとつとして取りこみ、動きの本質を、深いレベルで理解し、分解し、独自のダンススタイルとして再構成する必要があるのだ。

北尾亘はその中でも期待している存在だ。トヨタコレオグラフィーアワードでオーディエンス賞を獲った『vacuum』は、胸がすくようなイキのいいダンスだった。北尾自身の身体能力の高さに加え、群舞のレベルも高い。様々なタイプの曲をテンポ良く使い、振りや何段階にも加速していったスツと転調させるセンスの良さもある。

だがさらに感心したのが、『-W-』というカンパニー作品である。小さなスペースでの公演だった。これは持ち味である速さや軽さを押さえ、どっしりとした、控えめにいってもかなり地味な動きの作品を上演してみたのだ。

これには正直驚かされた。ただウケのいい得意技を並べるのではなく、絶えず新しいスタイルに挑戦していく。このセンスと度胸は、作り手として不可欠なものである。もちろん得意のバリバリ踊る部分もあるにはあるが、「そんなものはいくらでもできるよ」といわんばかりの態度が頼もしいではないか。カンパニーのダンサー達も、それぞれ魅力があり、非常に楽しみである。そして今回は「家庭」がテーマだという。ストーリー性のある作品なのか、うまくいくのかコケるのか。いずれにしろ手慣れたものを器用にまとめるのではなく、胸躍る作品になるはずだ。

流行などは置いておけ。アーティストは、そのときどきの自分が求めている直感に従って作品を作ればいいのである。そしてその直感を物にするセンスと力量のある者は、そんなに多くはないのだから。

#### 乗越たかお

作家・ヤサくれ舞踊評論家。ベストセラーとなった『コンテンポラリーダンス徹底ガイドHYPER』『ダンス・バイブル』等、著書多数。

### For the new work by Baobab

The number of works dealing with a strong sense of physicality, compared to more pretentious highly conceptual works, is growing in today's Japanese contemporary dance scene. It could be because people are seeking a "reality of the body", surviving in today's world, especially since 3.11.

Along these lines, incredibly powerful performances based on Hip Hop music are forming a certain trend. Now, what's important is not how to incorporate acrobatic movement into one's work. It shouldn't all be about technique. It should be looked at as one element of deconstructing dance in order to more deeply understand the nature of movement and reconstruct it into an original dance style.

Wataru Kitao is the artist I have my eyes on in that sense. The Audience Award at the Toyota Choreography Award 2012 winning *vacuum* was such a refreshing work. In addition to the amazing physical ability of Kitao himself, the level of the other dancers is outstanding. Employing various types of music, he has a great sense in accelerating choreography bit by bit and suddenly changes the tone.

Even more impressive was *-W-*. Performed in a small space, Kitao minimized the company's characteristic speed. The work was stout and very subtle.

I was unexpectedly taken in by his attempt. Not just focusing on what they are known for, which is guaranteed to be well-received, he continues to try out new styles. Great artistic sense and courage are indispensable for a creator. It is reassuring when they make us feel they can do much more than their energetic dance. Each company member has their own charm as well. I look forward to seeing where they go from here.

The theme of the company's new work is "family". Whether it has a strong narrative or not, it is well received or not, it will be an exciting work, not just a rehashing of what they've already accomplished. Forget about trends. Artists should always follow their own instincts in their work. After all there are so few who have the instinct and ability to embody such inspirations.

#### Takao NORIKOSHI

Performing arts critic and author of the best seller *Perfect Guide for Contemporary Dance: HYPER, Dance Bible* and others.

池田亮司

rrfih ffi iffieh a

PARIS

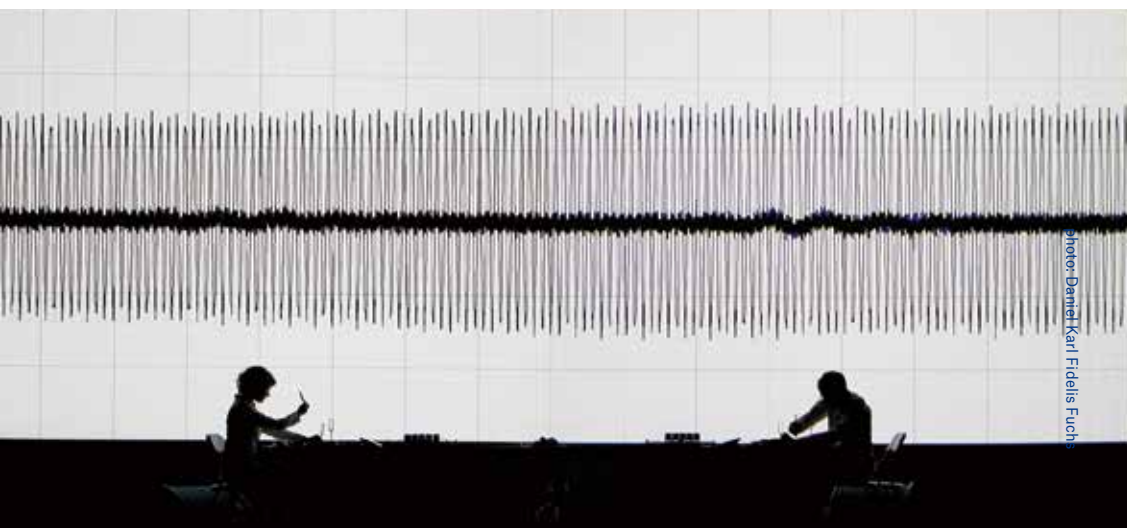


Photo: Daniel Karl Fideles Fuchs

## superposition

🕒 70 min (新作 | 日本初演 / New Creation | Japan Premiere)

📅 10/25(Fri) 19:30-  
10/26(Sat) 14:30-, 19:30-

\*開場は開演の30分前  
\*The theater opens 30 min.  
prior to the performance.

🔗 関連イベント シンポジウム「量子の新世紀」のアート&サイエンス  
Related Event Symposium "Art and Science in the New Quantum Century" →p.62

量子論的構造から紡がれる映像と音響が圧倒的強度で観客を包み込む新シリーズ、ついに日本初演

Japan premiere of Ikeda's new series.  
Vast audio-visual experience spun by quantum structure immerses the audience.

池田亮司の待望の新作パフォーマンスが遂に京都で日本初演を迎える。池田はパリを拠点に世界的に活躍する、電子音楽家でヴィジュアル・アーティスト。昨年のKYOTO EXPERIMENTでも、オーディオヴィジュアル・コンサート『datamatics [ver.2.0]』を春秋座の大空間で発表し、強烈な印象を与えたことは記憶に新しい。昨年11月にパリ・ポンピドゥーセンターで初演された「superposition」の新シリーズは、量子力学や量子情報理論を作品化しようとする野心的なプロジェクト。そのパフォーマンス版となる本作では、池田の作品では初の試みとなる生身の身体(2名のパフォーマンス)がステージに登場。合計22面のスクリーンが奥行きをもって配置され、ステージ上のすべての構成要素—サウンド、ヴィジュアル、物理現象、数学的概念、人間の行為そして無作為性—は、重ね合わせ(superposition)の状態となる。その崇高かつ圧倒的な空間体験は、池田流の〈世界〉への触れ方に違いない。

Long-awaited new work by Ryoji Ikeda comes to Kyoto for its Japan premiere. Ikeda, who lives and works in Paris, is a leading international electronic composer and visual artist. Last year's *datamatics [ver.2.0]* in the large space of Theater Shunjuza left a sensational impression. Premiered at Centre Pompidou in November 2012, 'superposition' is an ambitious project in which Ikeda develops quantum mechanics and quantum information theory into a work of art. In this performance piece, for the first time in Ikeda's work, performers appear on stage. A total of 22 screens are set on stage in 3 layers. All material used on stage - sound, visuals, physical phenomena, mathematical concepts, human behavior and randomness, will be shown in a state of superposition. The sublime and immersive experience of space is Ikeda's proclamation to the world.

📍 京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza



未就学児入場不可。  
本作品は強いストロボと重低音・高周波を使用いたしておりますので、心臓の弱い方やペースメーカーをご使用の方などはご遠慮下さい。

Children under school age are not accepted into the theater.  
Strobe Effect on video and high sound level during the show.

コンセプト・ディレクション・ミュージック：池田亮司  
出演：ステファン・ギャラン、アメリカ・グルウ  
プログラミング・グラフィック・コンピューターシステム：徳山知永、平川紀道、大西義人  
オプティカルデバイス：平川紀道  
ステージマネージャー：サイモン・マッコール  
テクニカルマネージャー：徳山知永  
プロダクションアシスタント：関根大輔  
製作：Ryoji Ikeda Studio, Quaternaire, Forma  
委嘱：フェスティバル・ドートンヌ(音楽部門)  
クリエーションサポート：Parc de La Villette (パリ)、山口情報芸術センター、ZKM (カールスルーエ)  
共同製作：KYOTO EXPERIMENT、フェスティバル・ドートンヌ、Les Spectacles Vivants - Centre Pompidou (パリ)、バービカン・センター(ロンドン)、Concertgebouw Brugge (ブルージュ)、Festival de Marseille\_danse et arts multiples (マルセイユ)、Parc de La Villette (パリ)、STRP アート・アンド・テクノロジーフェスティバル(アイトホーフエン)、ZKM (カールスルーエ)、Stereolux / Festival Scopitone / le lieu unique (ナント)  
助成：DICRÉAM-CNC (フランス)  
主催：KYOTO EXPERIMENT

Concept, direction & music: Ryoji Ikeda in collaboration with  
Performers: Stéphane Garin, Amélie Grould  
Programming, graphics & computer system: Tomonaga Tokuyama, Norimichi Hirakawa, Yoshito Onishi  
Optical Devices: Norimichi Hirakawa  
Stage manager: Simon MacColl  
Technical manager: Tomonaga Tokuyama  
Production assistant: Daisuke Sekine  
Production: Ryoji Ikeda Studio (Artistic direction: Emmanuelle de Montgazon, Administration: Yuko Higaki), Quaternaire (Producer and artist management: Sarah Ford, Associate producer: Laurie Uprichard, Administration: Kathleen Aleton, Coordination and marketing: Joanna Rieussec), Forma (Artistic Director: David Metcalf)  
Commissioned by the Festival d'Automne à Paris for the musical part  
Created and developed at Parc de La Villette (Paris), YCAM Yamaguchi Center for Arts and Media, ZKM (Karlsruhe)  
Co-production: Kyoto Experiment, Festival d'Automne à Paris, Les Spectacles Vivants - Centre Pompidou (Paris), Barbican (London), Concertgebouw Brugge (Bruges), Festival de Marseille\_danse et arts multiples, Parc de La Villette (Paris), STRP Art and Technology Festival (Eindhoven), ZKM (Karlsruhe), Stereolux / Festival Scopitone / le lieu unique (Nantes)  
With the support of the DICRÉAM-CNC (FR)  
Presented by Kyoto Experiment

## 池田亮司

1966年岐阜出身、パリ在住。日本を代表する電子音楽作曲家／アーティストとして、音そのものの持つ本質的な特性とその視覚化を、数学的精度と徹底した美学で追及している。視覚メディアとサウンドメディアの領域を横断して活動する数少ないアーティストとして、その活動は世界中から注目されている。音／イメージ／物質／物理的現象／数学的概念を素材に、見る者／聞く者の存在を包みこむ様なライブとインスタレーションを展開する。音楽活動に加え、「datamatics」シリーズ(2006-)では、映像、立体、サウンド作品を通じて、現代社会に広がる不可視なデータを知覚する事の可能性を探究している。「test pattern」プロジェクト(2008-)では、テキスト／音／写真／映像といったあらゆるタイプのデータを、バーコードおよびバイナリーパターンに変換するシステムを開発。テクノロジーと人間の知覚の臨界点に挑んでいる。「spectra」シリーズ(2001-)は、彫刻的な素材として用いた強烈な白色光によって公共空間を変容させる大規模インスタレーション。過去、アムステルダム、パリ、バルセロナ、名古屋の公共空間で展示されている。カーステン・ニコライとのコラボレーション・プロジェクトである「cyclo.」(2000-)では、コンサート、CD、書籍を通じて、音の視覚化をリアルタイムで行うオーディオ・ビジュアル・モジュールと共に、ソフトウェアとコンピュータでプログラムされた音楽の中で、エラー構造と繰り返されるループを考察している。

## Ryoji IKEDA

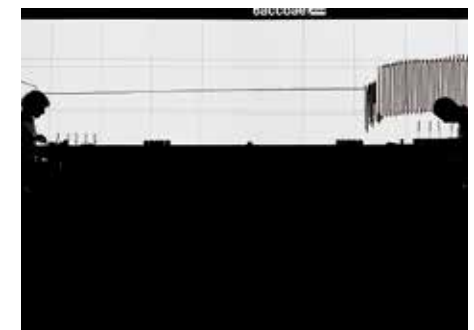
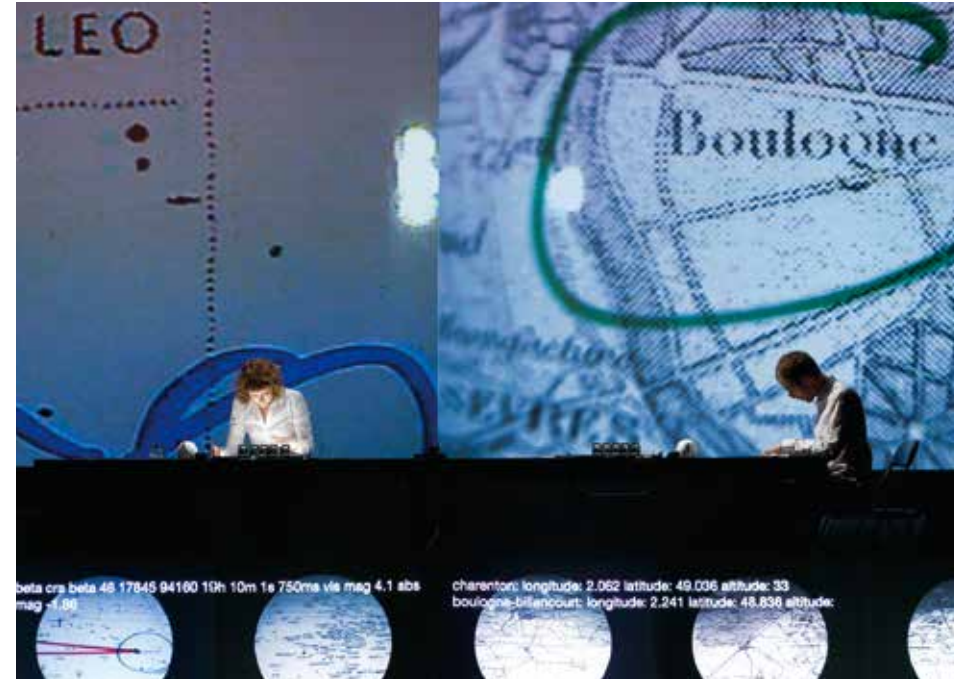
Born in 1966 in Gifu, Japan, lives and works in Paris, France. Japan's leading electronic composer and visual artist Ryoji Ikeda focuses on the essential characteristics of sound itself and that of visuals as light by means of both mathematical precision and mathematical aesthetics. Ikeda has gained a reputation as one of the few international artists working convincingly across both visual and sonic media. He elaborately orchestrates sound, visuals, materials, physical phenomena and mathematical notions into immersive live performances and installations. Alongside pure musical activity, Ikeda has been working on long-term projects: 'datamatics' (2006-) consists of various forms such as moving image, sculptural, sound and new media works that explore one's potentials to perceive the invisible multi-substance of data that permeates our world. The project 'test pattern' (2008-) has developed a system that converts any type of data - text, sounds, photos and movies into barcode patterns and binary patterns of 0s and 1s, which examines the relationship between critical points of device performance and the threshold of human perception. The series 'spectra' (2001-) is large-scale installations employing intense white light as a sculptural material and so transforming public locations in Amsterdam, Paris, Barcelona and Nagoya where versions have been installed. With Carsten Nicolai, Ikeda works a collaborative project 'cyclo.' (2000-), which examines error structures and repetitive loops in software and computer programmed music, with audiovisual modules for real-time sound visualization, through live performance, CDs and books (Raster-noton, 2001, 2011).

## 『superposition』上演歴

- |      |     |                              |
|------|-----|------------------------------|
| 2012 | 11月 | ボンビドゥーセンター(パリ)               |
|      |     | ※世界初演                        |
|      | 12月 | LE 104(パリ)                   |
| 2013 | 3月  | STRP FESTIVAL(アイントホーフェン)     |
|      |     | La Faiencerie(クレイユ)          |
|      |     | バービカンセンター(ロンドン)              |
|      | 4月  | Concertgebouw(ブルージュ)         |
|      | 6月  | Festival de Marseille(マルセイユ) |
|      | 9月  | Muziekgebouw(アムステルダム)        |

## superposition tour list

- |      |           |                                     |
|------|-----------|-------------------------------------|
| 2012 | 14-16 NOV | Centre Pompidou, Paris FR           |
|      |           | *world premiere                     |
|      | 7-8 DEC   | LE 104, Paris FR                    |
| 2013 | 8-9 MAR   | STRP FESTIVAL, Eindhoven NL         |
|      | 15 MAR    | La Faiencerie, Creil FR             |
|      | 27-28 MAR | Barbican, London UK                 |
|      | 10 APR    | Concertgebouw, Bruges, BE           |
|      | 22 JUN    | Festival de Marseille, Marseille FR |
|      | 13 SEP    | Muziekgebouw, Amsterdam NL          |



ロラ・アリアス

lola arias

● BUENOS AIRES



## 憂鬱とデモ

Melancholy and Demonstrations

🕒 70 min (日本初演 / Japan Premiere)

📅 10/25 (Fri) 20:00-  
10/26 (Sat) 17:00-  
10/27 (Sun) 17:00-

\*開場は開演の10分前

\*日本語字幕あり

\*The theater opens 10 min. prior to the performance.

\*Performed in Spanish with Japanese subtitles.

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance Talk

📍 京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium

脚本・演出: ロラ・アリアス  
振付・共同演出: ルティアナ・アクーニャ  
出演: エルヴィラ・オネット、ロラ・アリアス、  
マリオ・アイトル、ヴィンセンテ・フィロリッソ、  
エルネステイナ・ルッジェロ、ノエリア・  
シクスト

ドラマトウルク・制作: ソフィア・メディチ  
制作協力: ルス・アルグランティ  
音楽: ウリセス・コンティ  
映像: ネレ・ウォーラツ  
ライブ映像: マルコス・メディチ  
舞台美術: マリアナ・ティランテ  
衣裳: ソフィア・ベルアカ  
照明デザイン: マティアス・センドン  
舞台監督・照明操作: グスタボ・コティク  
共同製作: HAU Hebbel am Ufer, ウィーン  
芸術週間, Centro Cultural General San  
Martin  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Author & director: Lola Arias  
Choreographer & co-director: Luciana  
Acuña  
Performers: Elvira Onetto, Lola Arias,  
Mario Aitel, Vicente Fiorillo, Ernestina  
Ruggero, Noelia Sixto.  
Dramaturge & producer: Sofia Medici  
Artistic collaboration & production: Luz  
Algranti  
Music: Ulises Conti  
Video: Nele Wohlatz.  
Live video: Marcos Medici  
Stage design: Mariana Tirantte  
Costume: Sofia Berhaka  
Lighting design: Matias Sendón  
Technical manager & lighting adaptation:  
Gustavo Kotik  
Co-production: HAU Hebbel am Ufer, Wie-  
ner Festwochen, Centro Cultural General  
San Martin.  
Presented by Kyoto Experiment

実の母親に見出すアルゼンチン年代記。

劇作家で女優、ミュージシャンでもあるオールラウンダーが待望の来日

**Chronicle of Argentina inspired by the artist's mother.  
Playwright, actor and musician  
- a brilliant mind makes her Japan debut.**

劇作家、演出家、女優、ミュージシャン…とマルチな才能を発揮して活躍するアルゼンチンのアーティスト、ロラ・アリアス。昨年、アルゼンチンが誇る作曲家のウリセス・コンティと発表したアルバムでは、音響〜ポストロック〜ポエトリーリーディングを自在に行き来する奔放な資質が顕在化し、日本の音楽ファンの間でも知られる存在となった。一方、舞台作品はアルゼンチンのみならずヨーロッパの主要な演劇祭で既に発表され高い評価を得ており、今回ついに舞台作家として日本デビューが実現した。昨年、ウィーンで初演された『憂鬱とデモ』(原題: Melancholia y Manifestaciones) は、ロラ自身の母親の手記をベースにした作品である。ロラが生まれた1976年は、クーデターによって軍事独裁政権が生まれ、アルゼンチンの暗黒時代のはじまりとなった年。それは、進歩的な大学教授だったロラの母親にとっても、鬱々とした日々が始まりだった。激動の社会状況と身近でパーソナルな事態が重なりあう地平で、ロラは何度も母親に問いかける。「私を生んだせいなのか? 政治状況のせいなのか?」。母と娘、国家と個人、歴史と空想、憂鬱とデモ。過酷な政治的現実が、詩的に、ときにユーモラスに、心揺さぶる表現へと変奏される。

Argentinian artist Lola Arias works in different disciplines such as theatre, literature, music and art projects. Her theater work has been performed at major European festivals and theaters including In Transit Festival (Berlin), Theater Spektakel (Zurich), Festival d'Avignon and more. *Los que no duermen*, the album she produced last year with renowned composer Ulises Conti, runs from acoustic to post-rock to poetry reading. *Melancholia y Manifestaciones* (premiered in Vienna) is inspired by the diary of her own mother. In 1976, the year Lola was born, a coup d'état brought about a military dictatorship beginning Argentina's dark days. It was also the beginning of melancholic days for Lola's mother who was a progressive university professor. Where the tumultuous state of society and her personal life overlap, Lola finds more and more questions: Why did my mother get sick in 1976? Was it my birth? Was it the military coup? Mother and daughter, nation and individual, history and fiction, melancholy and demonstration intertwine. A tragic political reality is poetically and sometimes humorously, transformed into heart-rending drama.

## ロラ・アリアス

1976年ブエノスアイレス生まれ。作家、演出家、俳優、ソングライター。様々なジャンルのアーティストとコラボレーションしながら、演劇、文学、音楽作品、およびアート・プロジェクトを制作する。作品では、現実とフィクションが交錯する世界を扱う。作品には、プロの俳優だけでなく、一般の出演者、ミュージシャン、ダンサー、子供、赤ちゃん、動物などが登場する。

『Striptease』(2007)の主演は赤ん坊。その後ろで両親は、電話越しに言い争いをしている。『El amor es un francotirador』(2007)では、ロックバンドが演奏する中、俳優たちはフィクションとも現実とも思えるラブストーリーを繰り広げる。『Mi vida después』(2009)では、6人の俳優たちが、1970年代に自分の両親が若者だった頃を、写真、手紙、カセットテープ、古着などを使って再現する。

ドイツで作品を発表することも多く、『Familienbande』(2009)はミュンヘン・カンマーシュピレで、『That Enemy Within』(2010)はベルリンのHAU Hebbel am Uferで上演されている。最新作『憂鬱とデモ』(2012)は、ウィーン芸術週間のオープニング作品として上演された。

ウリセス・コンティと共同で作曲および演奏も手がけ、『El amor es un francotirador』(2007)および『Los que no duermen』(2011)というタイトルのCDもリリースしている。

著書も多数。執筆作品は、現在まで7カ国語以上の言語に翻訳されている。

<http://www.lolaarias.com.ar>

## Lola ARIAS

Writer, director, performer and songwriter. Born in 1976, based in Buenos Aires. Lola Arias collaborates with artists from different disciplines in theatre, literature, music and art projects. Her productions play with the overlapping zones between reality and fiction. She works with actors, non-actors, musicians, dancers, children, babies, and animals. Centre stage in *Striptease* (2007) is occupied by a baby, while its parents fight out a duel by telephone. In *El amor es un francotirador* (2007), the performers relate true and fictional love stories while a rock band plays live. In *Mi vida después* (2009), six actors reconstruct their parents' youth in 1970's Argentina by means of photos, letters, cassettes and old clothes. She staged in Germany *Familienbande* (2009) at Kammerspiele, Munich, and *That Enemy Within* (2010) at HAU, Berlin. Her last piece *Melancolía y Manifestaciones* (2012) opened in Viennese Festwochen. Together with Ulises Conti, she composes and plays music, and released the albums *El amor es un francotirador* (2007) and *Los que no duermen* (2011). Her texts have been translated into more than seven languages.



『憂鬱とデモ』 / *Melancoly and Demonstrations* (2012)

photo: Lorena Fernandez



*Mucamas* / *Hotel Maids* (2010)



*Familienbande* (2009)



*Mi Vida Después* / *My Life After* (2009)



*Trilogy: Striptease + Revolver Dream + Love Is A Sniper* (2007)

# ビリー・カウイー

bfiAfffi ch fife

BRIGHTON



photo: Billy Cowie

## “Art of Movement” and “Dark Rain”

《新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere》

《展示 Exhibition》

1 9/28(Sat) -10/27(Sun)  
10:00-20:00 会期中無休

《パフォーマンス Performance》

1 10/8(Tue) 20:00-  
10/9(Wed) 20:00-

60 min

\*10/5のみニュー・ブランシュ  
KYOTO 2013のため22:00まで  
(p.67)

\*Open until 22:00 on Oct 5  
for Nuit Blanche Kyoto 2013.

\*開場は開演の10分前

\*The theater opens 10 min.  
prior to the performance.

《展示 Exhibition》

京都芸術センター  
ギャラリー南  
Kyoto Art Center South Gallery

《パフォーマンス Performance》

京都芸術センター 講堂  
Kyoto Art Center Auditorium



本作の一部にはストロボ閃光に近い映像を伴うため、光過敏性癲癇または閃光によりめまいを感じる方の鑑賞はお控え下さい。

Due to the fast flashing stroboscopic nature of the visual images, the piece should not be viewed by anyone who suffers from photosensitive epilepsy or flicker vertigo.

生身と3D映像のダンサーが交錯!?

ライブパフォーマンスの意味を今改めて問いかける

Live and virtual 3D dancers intertwine!?

A reconsideration of the definition of “live performance”.

2012年のKYOTO EXPERIMENTでは、ダンサーの息遣い、微細な筋肉の動きまでも間近に感じる3D映像インスタレーションを展示したビリー・カウイー。ダンスパフォーマンスを二次元の映像に収め、それをまた擬似的な3次元の映像として投影する。迂遠にも思える作品ながら、ドローイングや音楽、言葉をダンサーの動きに重ねあわせた3D映像は、生の舞台とはまた違ったダンス体験を生み出した。昨年の京都滞在を通して、3人のダンサー（京極朋彦、南弓子、黒子沙菜恵）とともに製作した新作がインスタレーション作品として展示される。さらに今回は、実際のダンス公演としても2日間の上演が決定。3D映像とライブパフォーマンスの差異、舞台表現にまつわる一回性、テクノロジーと身体の融合…さまざまな問題意識が織りなす、貴重な試みとなるだろう。

Billy Cowie's 3D video installation at Kyoto Experiment 2012, in which the audience could feel the breathing and subtle muscle movements of the dancers, gave birth to a new dance experience. Filming dance performance and projecting it in three-dimensions is a seemingly roundabout approach, yet accompanied by superimposed drawings, music and spoken word, the work evokes a whole new and different sensation from live performance. In 2012, Billy launched his new production in Kyoto with three local dancers (Tomohiko Kyogoku, Yumiko Minami, Sanae Kuroko). His most recent work will premiere internationally at Kyoto Experiment 2013. It will be shown in the form of stage performance in addition to the 3D video installation in the gallery. The piece addresses various issues such as the difference between 3D image and live performance, the singularity of stage performance, and the marriage of technology and the human body among others. Definitely, a must-see experiment.

『Art of Movement』

演出・振付: ビリー・カウイー  
出演: 京極朋彦、南弓子、伊藤郁女(映像のみ)、大植真太郎(映像のみ)  
舞台美術: ジルケ・マンズホルト  
衣裳: ホリー・マリー  
声: ルーシー・ロブソン、キャスリン・ロブソン  
翻訳: 門田美和

『Dark Rain』

演出・振付: ビリー・カウイー  
出演: 京極朋彦、南弓子  
舞台美術: ジルケ・マンズホルト  
衣裳: ホリー・マリー

共同製作: KYOTO EXPERIMENT  
助成: アーツカウンシル・イングランド  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Art of Movement

Choreography & direction: Billy Cowie  
Dancer: Tomohiko Kyogoku, Yumiko Minami, [Featuring Kaori Ito and Shintaro Oue on video]  
Drawings: Silke Mansholt  
Costume: Holly Murray  
Voice: Lucie Robson and Cathryn Robson  
Trancelation: Miwa Monden

Dark Rain

Choreography & Direction: Billy Cowie  
Dancer: Tomohiko Kyogoku, Yumiko Minami  
Drawings: Silke Mansholt  
Costume: Holly Murray

Co-production: Kyoto Experiment  
Supported by Arts Council England  
Presented by Kyoto Experiment



## ビリー・カウィー

スコットランド出身の振付家／作曲家／映画監督。主にはダンス／演劇／インスタレーション作品を制作する。現在までにリズ・アッグギスと共同で、Divas Dance Theatre 向けに20作以上のパフォーマンス作品を制作。映像作品は、BBCのDance for the Cameraやイギリスのテレビ局 Channel 4 とのコミッションワークやアーツ・カウンシル・イングランドとの共同制作プロジェクトなど6作を制作。2006年にはカウィーの映像作品に関する書籍『Anarchic Dance』(ラウトレッジ出版)も出版されている。執筆した小説『Passenger』はイギリス、イタリア、フランスで出版されている。これまで制作した3Dビデオダンス作品は、現在まで6大陸20カ国以上で上演されており、2009年および11年のエジンバラフェスティバルBritish Councilショーケース、TPAM 2010、ブライトンフェスティバル2010のキャラヴァン・ショーケース、ラバンのBritish Dance Edition 2012、KYOTO EXPERIMENT2012で発表されている。現在はブライトン大学芸術学部の主任研究員。

## Billy COWIE

Billy Cowie is a Scottish choreographer, composer and filmmaker. He works principally in the area of dance/theatre performance, screen dance and installation. He has made over twenty live performance pieces (in collaboration with Liz Aggiss) for Divas Dance Theatre and he has completed six major screen projects (two BBC Dance for Camera commissions 'Beethoven in Love' and 'Motion Control' and three ACE Capture projects 'Anarchic Variations', 'Men in the Wall' and 'Doppelgänger' and a Channel 4 commission 'Break'). A book with DVD about this work entitled *Anarchic Dance* was published by Routledge in January 2006. His novel *Passenger* is published in UK, Italy (title *Due in Uno*) and France (title *L'incluse*). His stereoscopic dance installation works have been screened in over twenty countries on six continents and were featured in the British Council Showcases at the Edinburgh Festival in 2009/2011, TPAM 2010, Caravan Showcase in Brighton Festival 2010, British Dance Edition 2012 at Laban and Kyoto Experiment 2012. He is currently a Principal Research Fellow in the School of Arts at the University of Brighton.



Dark Rain

photo: Billy Cowie

## Artist in Residence at Kyoto Experiment 2012



photo: OMOTE Nobutada

高嶺格

tah astu taffiaffine

AKITA+BERLIN

## ジャパン・シンドローム～ベルリン編

Japan Syndrome -Berlin version

《新作 / New Creation》

《展示 Exhibition》

1 9/28(Sat)-10/27(Sun)

10:00-20:00 会期中無休

《パブリックビューイング Public Viewing》

1 10/5(Sat) 19:10-

※ニュー・ブランシュ KYOTO 2013 プログラム

\*Part of Nuit Blanche Kyoto 2013 Program

🔗 関連イベント アーティストトーク

Related Event Artist Talk →p.62

\*10/5のみニュー・ブランシュ  
KYOTO 2013のため22:00まで  
(p.67)

\*Open until 22:00 on Oct. 5  
for Nuit Blanche Kyoto 2013.

《展示 Exhibition》

📍 京都芸術センター  
ギャラリー北

Kyoto Art Center North Gallery

《パブリックビューイング Public Viewing》

📍 京都市役所前広場

Front Plaza of Kyoto City Hall

📍

『ベルリン編』は、10/6(Sun)以降に展示します。  
10/5(Sat)までは『関西編』『山口編』『水戸編』  
のみ展示

The Berlin version will be exhibited from 10/6.

製作総指揮:高嶺格

製作: KYOTO EXPERIMENT(関西編、ベルリン編)、山口情報芸術センター[YCAM](山口編)、水戸芸術館現代美術センター(水戸編)

協力: HAU Hebbel am Ufer

テクニカル・コーディネート: 夏目雅也

技術協力: 中上淳二

制作: 小倉由佳子

主催: KYOTO EXPERIMENT

Executive producer: Tadasu Takamine  
Production: Kyoto Experiment (Kansai version, Berlin version), YCAM Yamaguchi Center of Arts and Media (Yamaguchi version), Contemporary Art Center, Art Tower Mito (Mito version)

In cooperation with HAU Hebbel am Ufer

Technical coordinator: Masaya Natsume

Technical support: Junji Nakae

Production coordinator: Yukako Ogura

Presented by Kyoto Experiment

ブラジルから東北、そしてベルリンへ。

現在進行形のフクシマは、ヨーロッパにどう映っているか

From Brazil to Tohoku to Berlin.

How Europe Sees Fukushima Today.

2011年からKYOTO EXPERIMENTに参加している高嶺格。フェスティバル・パノラマとのエクステンジ・プログラムで地球の裏側、ブラジルに滞在し、映像インスタレーション、パフォーマンスとスタイルを変えながら、シリーズ「ジャパン・シンドローム」を展開させてきた。

これらの作品群は、高嶺ならではのアクチュアルな視点で、震災後の日本社会をゆるく覆う空気やムードを露わにすることになった。特に映像バージョンの『ジャパン・シンドローム』は、原発事故が与えた影響を街なかの商店などで取材、そのやりとりを演技としてスタジオ内で再現し、映像で記録するという仕掛けの作品で、これまで京都、水戸、山口で制作されてきた。

今回新たに『ジャパン・シンドローム～ベルリン編』として、インタラクティブな要素をもった作品へと姿を変え、これまでの延長上に大きな一歩を踏み出すことになる。現代日本の抱えるジレンマを顕在化させるこの作品は、1年間のアーティスト・イン・レジデンス先のベルリンで制作される。自身の体験、状況をビビッドに反映させながら、常に進行形で作品を生み出してきた高嶺。日本を離れ、遠くドイツから問い直す(我々の現在)。

This year marks Takamine's third appearance at Kyoto Experiment since 2011. Previously, he developed the 'Japan Syndrome' series in Brazil where he had residency through an exchange program with Panorama Festival. By changing the medium from video installation to performance, he has explored a way to reveal the subtle complexity and atmosphere of post-quake Japanese society. For the film version of the series, Takamine interviews people in stores and on the street about the aftermath of the nuclear accident, then films reenactments of the conversations in the studio with actors. The new Berlin version is the sequel to films produced in Kyoto, Mito and Yamaguchi. It evolves into something much more interactive, continuing to expose the dilemma facing Japan today. Takamine will develop the series in Berlin during his one-year residency. His own experience and surroundings have always been directly reflected in his work, thus his is always a work in progress. Looking at Japan from a distance, this work questions the idea of "who we are today".

## 高嶺格

高嶺格は、パフォーマンス、ビデオ、インスタレーションなど多様な表現を行っているアーティストである。アメリカ帝国主義、身体障害者の性、在日外国人などの社会問題を扱った作品、また移民労働者を取り上げた作品などで知られる。彼の作品は、国／ジェンダー／言語など、社会を構成するものの矛盾や不和を、自らの身体を使った表現で明らかにしようとする。彼の表現は声高にメッセージを叫ぶものではないが、差別や偏見のもとに横たわる、権力や抑圧をあぶりだす。舞台演出を含む近年の作品では、自身の体が直接舞台に現れることはない。しかしいかなる者と共同作業しようとも、高嶺の作品には、人間の身体が可能にする、画一化され得ない人間の野性的精神といったもの、あるいは熱狂的信頼関係といったものを見ることができる。

## Tadasu TAKAMINE

Takamine works in various media such as performance, video, installation and more. Known for his social commentary on US imperialism, sexual issues of the disabled, foreigners residing in Japan and migrant workers, he reveals the conflict and dissension in society: nationality, gender and language etc, through his own body. Without being vociferous, his art uncovers the power and oppression that lies at the bottom of discrimination and prejudice. Although in his recent work, including stage direction, his own body is not visually present, the presence a human spirit that resists uniformity, and a fanatic relationship of trust are always perceptible in Takamine's work, no matter who he collaborates with.



『ジャパン・シンドローム～山口編』 / Japan Syndrome -Yamaguchi version

## ABOUT THE WORK

「ジャパン・シンドローム」は、パフォーマーが町なかのさまざまな商店や施設で取材し、その様子を会話劇で再現した映像作品である。2011年9月に、KYOTO EXPERIMENTにおいて、「関西編」が発案、制作されたのち、2012年6月に「山口編」（山口情報芸術センター）、2012年8月に「水戸編」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）が制作された。それぞれの町のスーパー、食堂、鮮魚店、水族館などで、さりげなく放射能の影響について尋ね、その取材をもとに、スタジオでそのやりとりを再現するというこの作品。放射能という目に見えないものに対する情報の科学的根拠が揺らぎ、個々人の立場や考え方に微妙な差異が生まれ始めている。そのことを薄々私たちは感じ取り、原発や放射能の話題を日常で触れることに少なからずためらいを覚える風潮にある。取材をそのまま映像化するのではなく、会話劇によって再現することで、そんなムードに覆われた人々の目に見えない戸惑いや不安が、より増幅されて浮かび上がってくる。

'Japan Syndrome' is a video work in which actors interview people in stores and institutions in town and then reenact their conversations. The Kansai version was produced in September, 2011 for Kyoto Experiment 2011, the Yamaguchi version (at Yamaguchi Center for Arts and Media) in June, 2012, and the Mito version (at Contemporary Art Center, Art Tower Mito) in August, 2012. Casually questioning interviewees about the aftermath of the nuclear accident in grocery stores, restaurants, fish stores and aquariums in each town, it then films reenactments of the conversations in a studio with actors. With the official line regarding radioactivity having been discredited, individual stands and ideas have become more diverse. We gradually sense this and become hesitate to talk about nuclear issues and radioactivity in our day-to-day conversations. Instead of filming the interview itself, by reenacting it in a skit, the work illustrates and emphasizes people's invisible confusion and anxiety covering today's society.

『ジャパン・シンドローム～関西編』  
/ Japan Syndrome -Kansai version  
2011.09.10 生花店 / Flower Shop



—これって全然放射能の影響とかないんですか？  
— There's no danger of radiation?

『ジャパン・シンドローム～山口編』  
/ Japan Syndrome -Yamaguchi version  
2012.05.14 生活雑貨チェーン店  
/ Chain household goods store



—この原材料、ほうれん草とか、  
どこのものかってわかりますか？  
— Do you know the origin of the ingredients,  
like the spinach?

『ジャパン・シンドローム～水戸編』  
/ Japan Syndrome -Mito version  
2012.08.31 陶芸店 / Pottery Shop



—作家さんの方で土のこととかを  
心配してらっしゃる方とかいるんですか？  
— Do you know any artist who're concerned  
about the effects of radiation on their earthenware?



## FRINGE企画「使えるプログラム」

### 「劇は使える」

FRINGE企画では、2013年度より演出家・羽鳥嘉郎の企画立案による「使えるプログラム」が始まります。「劇は使える」をコンセプトに、「劇」を認知する回路が日常の関係やコミュニケーションにおいても使えることを示そうとするプログラムです。劇場でしか、あるいは演じられなければ「劇」はないのでしょうか？ だいたい、「劇」とは何でできているのでしょうか？

📅 9/28(Sat)-10/27(Sun)

📍 VOX SQUARE、ARTZONE、出町商店街、京都市立芸術大学 ギャラリーアクア、Pig & Whistle 京都店、元・立誠小学校、他

プログラムは[上演系][ワークショップ系][支援系][記録集]の四つの柱から成り、これらによって「劇は使える」というテーゼが、複合的に検討されていく。書かれたものに基づく必要がないのはもとより、「演」じる人間に完全に帰属することも、提示される「場」に完全に包含されることもないものとしての「劇」とは何か？ 劇の素材や成立の条件などを探究することを通じて、劇を「使える」ものへと開くこと、それが「使えるプログラム」の企図するところである。

[上演系]のゲスト参加者は、米光一成、ni\_ka、けのびの三組。作品と受け手との双方向的なコミュニケーションに一貫した関心を寄せるゲームデザイナーの米光一成は、『思考ツールとしてのタロット』や『言葉と脳、カードと仕組み(仮)』などの企画を会期を通して行う。演劇を含むさまざまな集団創作理論のハイブリッドとしてのこれらの企てにおいては、「人が集まること」それ自体のポテンシャルが様々なかたちで掘り起こされることとなるだろう。この探究の重要な媒介として、タロットカードのようなきわめて象徴性の高いツールが用いられることは、劇における言葉の地位を再考する契機にもなるかもしれない。ARアプリ「セカイカメラ」を活用し、画面を通じた拡張現実(AR)空間に詩を浮かべる作品、AR詩の試みで知られるni\_kaが提示するツアー・パフォーマンスAR詩劇『キャラクターズ・リップ』は、土地の歴史やそれに根ざした思いに追従するのでも、逆に土地の意味を収奪するのでもない、劇と土地の関係のあり方を考える手がかりとなるだろう。ご当地萌えキャラ「加茂川マコト」や、アニメ『たまこまーけっと』の舞台でもあった出町商店街を会場とする本作は、空間の情報論的拡張という事態そのものを複数化させ、劇とその環境についての新たな思考＝〈劇の生態学〉の展望を与える。

本プログラムのディレクターでもある羽鳥嘉郎を代表とするけのびは『ウィルキンソンと石』と『新しい宿に寄せて』の2作を上演する。近代日本における炭酸飲料水の受容へのリサーチと、石をおかずとして舌に味わわせ白米を食べる試み『おかず石』を踏まえた前者は、歴史と生理という二つの軸を直交させつつ、劇の「主体」を、もはやそのようには呼べない何かへと作り変えていく極めて長大な射程を備えたものとなりうる。「再現可能な〈よさ〉」の内容を義務という形で引き出すことを旨とした後者は、「使える」という言葉に含意される一般的な活用可能性と功利性の問いに対する真っ向からのアプローチと捉えられる。そしてまた[ワークショップ系]への参加は、彼らの制作方法に触れてそれを持ち帰ることを可能にするだろう。加えて、公募により選ばれた[支援系]参加者の企画が行われる。澄井葵(5)による上演『いいわけの先』及びワークショップ『身体から劇を抜き出すボディワーク』や、森陽平(HOME)による上演『わたしのあいだ』、山崎健太による作品評などが予定されている。会期後には、プログラムで検討された内容を共有するために[記録集]がまとめられる。これを参照することにより、プログラムの成果はさらに実践的かつ遠くまで「使える」ものとなるだろう。脱劇場的な演劇実践への関心は、近年国内外において様々な高まりを見せているが、既存の演劇の慣習やそれをめぐる欲望を問い直すことがなければ、単なる趣向・スタイル・テクニックの新奇さに墮してしまいかねない。最も形式的な水準において「劇」を問うことが、同時に最も具体的な水準での利用可能性に結びつく。「使えるプログラム」とは、そうした一見逆説的な、しかし実際にはごく必然的な事態を指定することである。

江口正登(「使えるプログラム」批評担当)  
羽鳥嘉郎(「使えるプログラム」ディレクター)

## FRINGE “The Useful Program”

### Theater is useful.

In 2013, Fringe launches the “The Useful Program” curated by stage director Yoshiro Hatori. With the concept of “Theater is useful”, the program aims to demonstrate that the process of perceiving and recognizing theater can be applied to our day-to-day communication and relationships. Does “theater” need to be performed? Or does it have to take place in theater? What exactly are the components of “theater”?

📅 9/28(Sat)-10/27(Sun)

📍 VOX SQUARE, ARTZONE, Demachi Shopping District, Kyoto City University of Arts Art Gallery @ KCUA, British Pub Pig & Whistle, Former Rissei Elementary School and more

The program consists of four series: “performance”, “workshop”, “support” and “documents”. Through these activities, the concept, “Theater is useful”, will be examined multi-directionally. Obviously, it is not necessary for theater to be based on a written script. So what is “theater” that is not necessarily needs to be acted by human performer nor is necessarily identified with the “space” where it takes place? By exploring its materials and conditions, the program aims to show “theater” to be useful. The three guest artists for the performance program are Kazunari Yonemitsu, ni\_ka and Kenobi.

Kazunari Yonemitsu is a game designer who is consistently interested in interactive communication. He will host programs such as *Tarot as a Thinking Tool* and *Language and Brain / Card and Mechanism (working title)* throughout the festival. Cross-breeding various creative theories including theater, these programs unearth the potential of *people gathering* in various ways. Tarot is a highly symbolic medium. Using it as a crucial tool for this exploration may give us an opportunity to reconsider the role of words in theater.

ni\_ka is known for her augmented reality poetry in which a poem is displayed in the augmented reality space via the screen, using smart phone’s AR application. It looks as if words are floating in the space. For the program, she presents a tour performance *AR poem theater Character’s Liberation*. It doesn’t depend on the history of, or a thought confined to, a place. Nor is it about depriving the identity of a place. It inspires us to think about the relationship between theater and place. Featuring Demachi shopping district, the home of local mascot character “Kamogawa Makoto” and the setting of the animation piece *Tamako Market* as a venue, the work even multiplies the idea of augmented space itself based on information theory and gives a new perspective for theater and its environment, or the “Ecology of Theater”. Kenobi introduces *Wilkinson and Stones* and *For a New*

*Inn. Wilkinson and Stones* is based on market research for carbonated water in modern Japan and a sequel to workshop *Side-dish Stone* in which people try to eat white rice, with stones as side dish. It’s quite a grand attempt to transform the “subject” of theater into something that is no longer considered as such while crossing two axes: history and physiology. *For a New Inn* aims to extract reproducible “goodness” in the form of obligations. It is a straightforward approach to the general applicability and utilitarianism implicated in the word “useful”.

Those who participate in the workshops can encounter these ideas through hands-on work and bring inspirations home. For the support program, selected artists will conduct various attempts. Aoi Sumii from ,5 will introduce a performance *The Top of Excuse* and conduct a workshop *Bodywork for pulling theater out of your body*. Yohei Mori from HOME will introduce *watashi no aida*, and Kenta Yamazaki will comment on the program. At the end of the festival, all the endeavors will be compiled as a booklet “documents”, in order to share the ideas and thoughts examined throughout the programs. Using the booklet as a reference will make the results of the program more “useful” and far-reaching. Interest in de-theatrical practice is growing in Japan as well as overseas. However, without questioning conventional theater practice or the desires surrounding it, this trend can end up being merely a matter of taste, style or technique. **Thinking about “theater” in the most formalistic way lead to its greater applicability in very concrete way.** “The Useful Program” do codify such seemingly paradoxical yet in fact quite inevitable process.

Masato Eguchi (“The Useful Program” Critic)  
Yoshiro Hatori (“The Useful Program” Director)



**米光一成**

1964年生まれ。ゲームデザイナー、立命館大学映像学部教授。代表作『ぶよぶよ』『パロック』。近年は雑誌連載や宣伝会議の教育講座などにて表現や編集の講師を務めるほか、様々なイベントのオーガナイズが注目を集める。

**Kazunari Yonemitsu**

Born in 1964. Game designer. Professor at the college of image arts and sciences, Ritsumeikan University. Creator of *Puyo Puyo*, *Baroque* and other games. Has written articles for magazines and given lectures on creation and editing at the Sendenkaigi Co., Ltd's lecture series. He has also organized various events in recent years.



**ni\_ka**

詩人・アーティスト。東京都品川区生まれ。中央大学法学部卒業。2008年より「モニタ詩」をブログ上で発表。2011年からはAR(拡張現実、Augmented Reality)というテクノロジーを使った「AR詩」を制作し、詩を現実の空間上に配置しようと試みている。「DOMMUNE オフィシャルガイドブック」、「現代詩手帖」、「Web Designing」などで注目の新進作家として紹介。

**ni\_ka**

Poet / Artist. Born in Shinagawa, Tokyo. Graduate of the faculty of law at Chuo University. Began blog post "monitor poem" in 2008. Started creating "AR poem" in 2011 using augmented reality technology, in which she can display poems in the real world. Introduced as a promising artist in *DOMMUNE official guide book*, *Gendaishi techo*, *Web Designing* and more.



**けのび**

2009年より活動。「いかにしてともに生きるか」をテーマに、劇の素材は「集合」であるという思考に基づき、人間その他の集合のあり方や認知の可能性を、シアターにとどまらず模索し続ける。広義の(いつでもどこでも誰でも使うことができるかもしれない)演出と言える、「教え」や「心がけ」をパフォーマンスを通して制作する『等々力』(2010)、『新しい宿に寄せて』(2011)、ワークショップ『自治』シリーズを各地で展開する。また、いつか行こうかもしれない(授業にあたり教職員が作成するような)プラン自体をつくるワークショップ『指導案の会』など、活動のラディカルさには定評がある。

**Kenobi**

Launched in 2009 with the theme of "harmonious coexistence", the company considers "assembly" to be the basis of theater. As a way to explore the possibilities of assembly and the perception of it in human and other forms, created *Equal Equal Powers* (2010) and *For a New Inn* (2011), with very familiar themes such as "teaching" and "intention". They are known for pushing boundaries with their workshop series 'Self-government', conducted across Japan, and *Teaching Plan Meeting*, a workshop in which participants create the workshop plan itself and which may or may not be conducted in the future again.

「使えるプログラム」クレジット

ディレクター: 羽鳥嘉郎(けのび) / 支援系A参加者: 澄井葵(,5)、森陽平(HOME)、山崎健太 / 支援系B参加者: 池田みのり、本多萌恵、御厨亮、三栖千陽、森友希 / 運営: 伊藤拓(Pan///) / 制作: 中山佐代(マレビトの会)、展示制作: 奥村りな / 記録集編集: 印牧雅子(BAL) / 批評: 江口正登(パフォーマンス研究/表象文化論)、富田大介(大阪大学大学院国際公共政策研究科特任助教) / 記録写真: 西澤諭志 / 記録映像: ササキユイイチ

"The Useful Program" Credits

Director: Yoshiro Hatori (Kenobi) / Support A: Aoi Sumii (,5), Yohei Mori (HOME), Kenta Yamazaki / Support B: Minoru Ikeda, Moe Honda, Ryo Mikuriya, Chiharu Misu, Yuki Mori / Production coordinator: Taku Ito (Pan///), Sayo Nakayama (marebito theater company) / Exhibition design: Rina Okumura / Editor: Masako Immaki (BAL) / Critic: Masato Eguchi (study of culture and representation), Daisuke Tomita (Graduate School of Osaka University assistant professor) / Photo: Satoshi Nishizawa / Video: Yuichi Sasaki

参加者 Artist	カテゴリー Category	タイトル Title	日時 Date	会場 Venue	料金 Ticket Price
米光一成 Kazunari Yonemitsu	WS系 Workshop	おもしろいカードゲームとその仕組み <i>Fantastic Card Game and Its Mechanism</i>	9/29(Sun) 15:00-	ARTZONE	¥2,000(当日+¥500) 『思考ツールとしてのタロット』とセット券あり。 ¥3,000(当日+¥500)
	上演系 Performance	思考ツールとしてのタロット <i>Tarot as a Thinking Tool</i>	9/29(Sun) 18:00-	ARTZONE	¥2,000(当日+¥500) 『おもしろいカードゲームとその仕組み』とセット券あり。 ¥3,000(当日+¥500)
	WS系 Workshop	言葉と脳、カードと仕組みワークショップ(仮) <i>Language and Brain / Card and Mechanism Workshop (working title)</i>	9/30(Mon) 19:00-10/7(Mon) 19:00-10/14(Mon) 15:00-	VOX SQUARE	¥1,000
	上演系 Performance	言葉と脳、カードと仕組み(仮) <i>Language and Brain / Card and Mechanism (working title)</i>	10/14(Mon) 18:00-10/26(Sat) 19:00-10/27(Sun) 17:00-	VOX SQUARE	¥2,000(当日+¥500)
ni_ka	上演系 Performance	AR詩劇『キャラクターズ・リブ』 <i>AR poem theater Character's Liberation</i>	10/4(Fri) 15:00-18:00 10/5(Sat) 11:00-18:00 10/6(Sun) 11:00-18:00 ※上記の時間中はご自由にご覧頂けます。	出町商店街+α Demachi Shopping District	¥700
	WS系 Workshop	わたしたち、AR詩劇を、編むタイプ <i>We play AR-poetic-drama</i>	10/10(Thu) 18:00-	元・立誠小学校職員室 Former Rissei Elementary School	¥1,000
けのび Kenobi	上演系 Performance	ウィルキンソンと石 <i>Wilkinson and Stones</i>	9/28(Sat) 18:00- 10/6(Sun) 20:00-10/13(Sun) 20:00-10/27(Sun) 20:00-	VOX SQUARE Pig & Whistle 京都店	¥2,000 ¥1,500+1drink ※20歳未満の方はご入場頂けません。
	上演系 Performance	新しい宿に寄せて <i>For a New Inn</i>	10/11(Fri) 19:00-10/26(Sat) 17:00- 10/12(Sat) 16:00-	元・立誠小学校第2音楽室 Former Rissei Elementary School 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA Kyoto City University of Arts Art gallery @KCUA	¥2,000
	WS系 Workshop	おかず石 <i>Side-dish Stone</i>	10/5(Sat) 13:00-	JR笠置駅周辺 ※JR笠置駅集合 ※雨天中止	¥500 ※当日券なし
	WS系 Workshop	自治:京都 <i>Self-government: Kyoto</i>	10/8(Tue) 14:00-10/15(Tue) 14:00-10/21(Mon)-10/24(Thu)14:00- ※1日からご参加頂けます。	VOX SQUARE	¥1,500
	WS系 Workshop	指導案の会 <i>Teaching Plan Meeting</i>	10/19(Sat) 13:00-10/20(Sun) 13:00- ※1日からご参加頂けます。	VOX SQUARE	¥1,000
	支援系 澄井葵(,5) Aoi Sumii	上演系 Performance	いいわけの先 <i>The Top of the Excuse</i>	10/13(Sun)-10/14(Mon) 予定 ※10/12(Sat)は公開稽古(無料)	VOX SQUARE
	WS系 Workshop	身体から劇を抜き出すボディワーク <i>Bodywork for pulling theater out of your body</i>	9/28-10/27の会期中、10/12・13を除く毎週土日。1日1名様。当日券なし。時間応相談。会場の詳細はご予約の際にお伝え致します。		¥1,000
支援系 森陽平(HOME) Yohei Mori (HOME)	上演系 Performance	わたしのあいだ <i>watashi_no_aida</i>			無料 詳細は決まり次第、「使えるプログラム」ウェブサイト [http://kyoto-ex-useful.jp]にてお知らせします

ゲスト参加者の各チケットのお取扱いは、「使えるプログラム」ウェブサイト、KYOTO EXPERIMENT チケットセンター(窓口のみ)。支援系参加者のチケットは各参加者の取扱となります。  
※公演の詳細、最新情報は「使えるプログラム」ウェブサイトhttp://kyoto-ex-useful.jp/をご覧ください。

## FRINGE企画「オープンエントリー作品」/ Fringe “Open Entry Performance”

KYOTO EXPERIMENT 2013では、新たなFRINGE企画「オープンエントリー作品」として、フェスティバル開催期間中(2013/9/28 - 10/27)に京都府下で発表される作品を一挙に紹介いたします。条件を満たせば、ジャンル不問・審査なしで登録可能。エントリーされたのは計20作品! さまざまな演劇・ダンス・音楽が、京都内外から集結します。京都のどこかでなにかに必ず出会える一カ月。舞台芸術の秋を、どうぞ心ゆくまでお楽しみください。

### 01 ● KYOTO | THEATER

#### THE GO AND MO'S

『岩田の禁』  
Block of "IWATA"

なりふり構わぬ「笑い」の「実験」を仕掛け続けるパフォーマンス企画ユニットの新作。

New production by the performance-planning unit who blindly continue to "experiment" with what makes people "laugh".

9/27(Fri) 19:30  
9/28(Sat) 14:00, 19:00  
9/29(Sun) 13:00, 17:00  
▲ 吉坪シアター スワン  
Hito-tsubo Theater Swan  
▼ 予約 / Reservation ¥1,000  
当日 / Day ¥1,200

### 02 ● KYOTO | THEATER

#### 夕暮れ社 弱男ユニット

#### Yuuguresya yowaotoko unit

夕暮れ社<文学作品へのチャレンジ> ARTZONE先行上演>『或A先生の新作』 Yuuguresya presents <The trial to a literary work>@ARTZONE Precedence performance<The latest work of a great writer "A" >

東京・中野RAFT【芥川龍之介文学ナー×÷】(11月1日-11月3日)でも上演します。

The work will also be shown at Tokyo / Nakano RAFT [Ryunosuke Akutagawa Literature ナー×÷] from 11/1 to 11/3.

9/27(Fri) 19:30, 22:30  
9/28(Sat) 15:30, 19:30  
▲ ARTZONE  
▼ 前売 / Adv. ¥1,500  
当日 / Day ¥1,800

### 03 ● TOKYO | DANCE + THEATER

#### 富士山アネット× 富士山アネット/Manos.(マノス)

FujiyamaAnnette×  
FujiyamaAnnette / Manos.  
Woyzeck / W

「富士山アネット、解体。」ビューヒナー 生誕200年。『ヴォイツェク』を演劇とダンスで。  
"Fujiyama Annette dismantled". 200th anniversary of the birth of Büchner. Woyzeck in theater and dance.

A | Annette ver. (Dance)  
M | Manos. ver. (Theater)

9/28(Sat) 16:00(A), 19:00(M)\*  
9/29(Sun) 11:00(A), 14:00(M), 17:00(A)\*  
9/30(Mon) 11:00(M), 14:00(A), 17:00(M)  
\*ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-Performance Talk

▲ アトリエ劇研  
atelier GEKKEN  
▼ 一般前売 / Adult adv. ¥2,900  
※当日券は前売料金+¥200  
\*Plus ¥200 for Day ticket.  
学生 / Student ¥2,500  
※KYOTO EXPERIMENT2013公式プログラム半券持参にて一般料金各¥200引  
※他券種あり

### 04 ● KYOTO | MUSIC + DANCE

#### 蛇香 JAKOW

『蛇香祭』  
Jakow festival

ベリーダンスとロックサウンドの融合するユニット「蛇香」がゲストを招いて大宴会!!

JAKOW, featuring belly dance and rock sounds, throws a great banquet with great guests!

9/28(Sat) 19:30  
▲ UrBANGUILD  
▼ 前売 / Adv. ¥2,500  
当日 / Day ¥3,000  
(1ドリンク付 / including 1 drink)

### 05 ● KYOTO | MUSIC

#### 中川裕貴、バンド yuki nakagawa, band

out of / think of / contemporary music

「音楽家は舞台上は素晴らしい音楽だけをやっていれば良い」は信じられない。  
We no longer believe that musicians only need to play beautiful music on stage.

9/30(Mon) 20:00  
10/7(Mon) 20:00  
▲ UrBANGUILD  
▼ 入場無料(投げ銭方式)  
/ free admission

KYOTO EXPERIMENT 2013 introduces various works performed in Kyoto during the festival (2013/9/28-10/27) as a part of the new FRINGE program, "Open Entry Performance". As long as it meets the terms for entry, any work, regardless of genre, can enroll without screening. For this year, a total of 20 works are enrolled. Different types of theater, dance and music pieces from Kyoto and elsewhere come together. For the whole month, everywhere you go you can encounter some kind of performance. Enjoy the season for performing arts!

### 06 ● KYOTO | COMIC PLAY

#### 努力クラブ

#### Effort Club

努力クラブ必見コント集

『流したくない涙を流した』

Effort Club's Can't-miss Funny Skits  
I Never Meant to Cry (but I did)

面白いコントをします。  
Funny comedy skits.

10/1(Tue) 19:30  
10/2(Wed) 15:00, 19:30  
▲ UrBANGUILD  
▼ ¥1,800  
(1ドリンク付 / including 1 drink)

### 07 ● NAGOYA | THEATER

#### 劇団うりんこ

#### Theatre company URINKO

『罪と罰』

Crime and Punishment

ラスコーリニコフが出口を探した13日間ドストエフスキー、147年前の名作を舞台化

Thirteen days of Raskolnikov looking for a way out. Turning Dostoyevsky's 147-year-old masterpiece into a play.

10/5(Sat) 14:00  
▲ 京都市北文化会館  
Kita Bunka Kaikan  
▼ 一般前売 / Adult adv. ¥3,000  
学生前売 / Student adv. ¥2,300  
※当日券は前売料金+¥500  
\*Plus ¥500 for Day ticket.

### 08 ● OSAKA | DANCE

#### 淡水

#### Water that is not salty

魚企画vol.5 『Km.の覗き方』

Km is looked into.

それぞれ持っているそれぞれの距離をみつめる、身体で。もう少し遠くの方まで。 Gazing into the distances we all have, through our bodies. Try to look a little further.

10/6(Sun) 18:30  
▲ UrBANGUILD  
▼ 一般前売 / Adult adv. ¥2,000  
学生前売 / Student adv. ¥1,500  
※当日券は前売料金+¥300  
\*Plus ¥300 for Day ticket.  
(1ドリンク付 / including 1 drink)

### 09 ● KYOTO | THEATER

#### 劇団衛星

#### Gekidan Eisei

『岩戸山のコックピット』

Cockpit at Iwato-yama

各回50席限定! 「コックピット」にまつわる、クロスジャンルの舞台芸術祭

A cross-genre performing arts festival about "cockpit". 50 seat limit for each show!

10/7(Mon)~27(Sun)  
全35ステージ+関連企画  
▲ KAIIKA  
▼ プログラムA / Program A ¥2,000  
プログラムB / Program B ¥1,500  
プログラムC / Program C ¥1,000

### 10 ● KYOTO | THEATER

#### 村川拓也

#### Takuya Murakawa

『エヴェレットラインズ』

EVERETT LINES

上演の為に仕組みられた台本に、従い集う者/従わず集わない者たちのための演劇

Theater for those who follow and come together around a written script and for those who don't.

10/8(Tue) 19:00  
10/9(Wed) 13:00, 17:00  
※各回とも荒木優光『パブリックアドレス』との2本立て上演。1枚のチケットで2作品ご覧いただけます。  
\*This work is a double bill with Public Address by Masamitsu Araki.

#### ▲ アトリエ劇研

atelier GEKKEN

▼ 一般 / Adult ¥2,000  
学生 / Student ¥1,800

### 11 ● KYOTO | SOUND PERFORMANCE

#### 荒木優光

#### Masamitsu Araki

『パブリックアドレス』

Public Address

煙にまかれた実験体「あ」を巡る、マイクとスピーカーによるチープなオペラ  
A cheap opera with microphones and speakers about the mystifying subject "A".



01 photo: Ai Nakagawa



02



03 photo: Hideki Namai



04 photo: Kazuo Yamashita-clip



05



06 photo: Shizuka Tsukiji



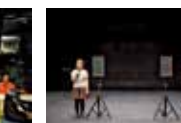
07 photo: Jiro Shimizu



08 photo: Toshihiro Shimizu



09



10 photo: Tsukasa Aoki

10/8(Tue) 19:00  
10/9(Wed) 13:00, 17:00  
※各回とも村川拓也『エヴェレットラインズ』との2本立て上演。1枚のチケットで2作品ご覧いただけます  
\*This work is a double bill with *EVERETT LINES* by Takuya Murakawa  
▲アトリエ劇研  
atelier GEKKEN  
¥一般 / Adult ¥2,000  
学生 / Student ¥1,800

12  
● FRANCE | MUSIC  
Hugues Vincent

*Velvet Moon Hugues Vincent Special 3days*

スーパーチェリストがフランスから来日！  
迎え撃つ京都勢も超豪華！  
Virtuoso cellist from France comes to Japan! An extravagant encounter featuring Kyoto artists as well!

10/8(Tue) 19:30  
10/10(Thu) 19:30  
10/14(Mon) 19:30  
▲UrBANGUILD  
¥未定

13  
● KYOTO | DANCE + MUSIC  
竹ち代穂也 x 豊田奈千甫 = 黒子沙菜恵  
Mariya Takechiyo x Nachiho Toyota = Sanae Kuroko  
『30回有効のパスポート』  
Passport valid for 30 times

竹ち代穂也・豊田奈千甫・黒子沙菜恵の3人が様々な条件の場所で上演する期限付きのユニット  
Side project unit by Mariya Takechiyo, Nachiho Toyota and Sanae Kuroko performs at a variety of venues.

10/11(Fri) 19:30  
10/12(Sat) 15:30, 19:30  
▲UrBANGUILD  
¥前売 / Adv. ¥2,000  
当日 / Day ¥2,300  
(1ドリンク付 / including 1 drink)

14  
● KYOTO | THEATER+DANCE  
ドキドキぼーいず  
Dokidoki Boys  
ドキドキぼーいずの紅葉狩り#02  
『浮いちゃった☆』  
*Oopus! I've floated☆*

重力に逆らうように、あの子は恋に落ちた。  
She fell in love as if defying gravity.

10/11(Fri) 13:00, 15:30, 18:00  
10/12(Sat) 13:00, 15:30, 18:00  
10/13(Sun) 14:00  
▲京都市東山青少年活動センター  
創造活動室  
Higashiyama Youth Action Center  
Sozo katsudou sitsu  
¥一般前売 / Adult adv. ¥1,200  
学生前売 / Student adv. ¥800  
※当日券は前売料金+¥200  
\*Plus ¥200 for Day ticket.

15  
● KYOTO | THEATER  
笑の内閣  
warainonaikaku  
『高間響国際舞台芸術祭』  
takamahibiki EXPERIMENT

高間響、KEXに選ばれなかった腹いせに勝手に開催  
Hibiki Takama hosts his own festival in response to not being chosen for KEX.

10/12(Sat) 13:00, 18:30  
10/13(Sun) 11:00, 18:30  
10/14(Mon) 11:00, 16:00  
▲アトリエ劇研  
atelier GEKKEN  
¥一般早割 / Adult (until 9/30) ¥2,500  
一般前売 / Adult adv. ¥3,000  
※他、学生チケット等あり  
※当日券は前売料金+¥500  
\*Plus ¥500 for Day ticket.

16  
● OSAKA | DANCE  
田中千晶  
Chiaki Tanaka  
esPACE

そこにあること。憶えて記しても、その断片を集めてもいい。  
Things that are there. You could try to remember them or collect the fragments.

10/25(Fri) 19:00, 20:30  
▲flowing KARASUMA  
¥¥1,000  
(1ドリンク付 / including 1 drink)

17  
● KYOTO | DANCE  
双子の未亡人  
Twin Widows  
『ぶこつな霞』  
BUKOTSU na KASUMI

形をとどめたいという願望が薄まっていく。そもそもなぜ、とどまらなかったのだろう？  
My desire to preserve form becomes less and less. Why did I want to preserve it to begin with?

10/24(Thu) 19:00\* プレビュー公演  
10/25(Fri) 18:30, 20:30  
10/26(Sat) 13:00, 15:00, 19:00  
10/27(Sun) 13:00, 15:00, 17:00  
▲Gallery PARC  
¥1回 / 1 performance ¥1,500  
2回 / 2 performances ¥2,500  
プレビュー公演 / preview ¥1,000

18  
● OSAKA | THEATER  
奇劇屋  
ICHIGEKIYA  
『6人の悩める観客』  
Beleaguered audience of 6 people

俳優を客席に、観客を舞台に。「小劇場」で上演される世にも不思議な演劇作品。  
Actors in the audience and audience on the stage. A mysterious theater piece, taking place in a "small theater."

10/25(Fri) 18:05  
10/26(Sat) 12:05, 18:05  
10/27(Sun) 13:05

▲京都市東山青少年活動センター  
創造活動室  
Higashiyama Youth Action Center  
Sozo katsudousitsu  
¥¥1,500

19  
● KYOTO | THEATER  
fukui企画  
fukui kikaku  
『就活魔女☆とろみ』  
Jobhunter Toromi

私あの、いつまでも魔法少女とかやっつられないんで。もう22なんで。就職します。  
Well, I cannot be a witch-girl forever. I'm 22 years old. I need to get a job.

10/25(Fri)  
10/26(Sat)  
10/27(Sun)  
10/28(Mon)  
▲アトリエ劇研  
atelier GEKKEN  
¥前売 / Adv. ¥1,000  
当日 / Day ¥1,500

20  
● KYOTO | THEATER  
BRDG  
『ヒキダシ\_ホテル』  
Hotel of Drawers

京都という町の“Local”な“国際性”を見つめる“通訳 Interpreting 劇 Theatre”。  
Exploring the “local internationality” of Kyoto. It is an “Interpreting Theatre”.

10/26(Sat) 14:00, 19:00  
10/27(Sun) 14:00, 19:00  
▲遠藤剛熙美術館  
Musée Gohki Endoh  
¥前売 / Adv. ¥1,800  
当日 / Day ¥2,000  
(美術館入館料を含む / including admission)

Notes  
※詳細は、KYOTO EXPERIMENT公式ウェブサイトおよび各上演団体のウェブサイトをご参照ください。  
※KYOTO EXPERIMENTでは、オープンエントリー作品のチケットを取り扱っておりません。チケットに関しては、直接上演団体にお問合せください。  
\* For more information, see the website [http://kyoto-ex.jp] or each company's website.  
\* Tickets only available at each company.



11



12



13



14



15 photo: Takuyuki Matsuyama



16



photo: bozzo



photo: Sajik Kim



photo by Saori Kawanishi



photo: Hanabi Takemiya

photo: Koichiro Kojima



## 関連イベント

9/17 (Tue)-9/29 (Sun)

11:00-19:00



松延総司展「“Twisted Rubber Band” and “Humming”」

美術作家、松延総司による個展。今年のフェスティバルのメインイメージとなった、作品『Twisted Rubber Band』を中心に展示します。

会場: Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・パルク]

京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル

料金: 無料

協力: Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・パルク]

9/30 (Mon) 17:00-19:00

『突然どこもかしこも黒山の人だかりとなる』 関連レクチャー  
「〈周縁〉をめぐって」

マルセロ・エヴェリンの作品に関するレクチャーを開催します。

スピーカー: マルセロ・エヴェリン 聞き手: 國吉和子(舞踊研究・評論)

会場: 京都芸術センター ミーティングルーム2

※言語: 英語(日本語逐次通訳あり) 定員: 30名 料金: 無料 [要申込]

10/3 (Thu) 15:00- / 17:00-

10/6 (Sun) 11:00- / 13:30-



©Goethe-Institut

『シュプラーデン(引き出し)』 関連上映会  
「映画で見る東ドイツ」

ベルリンの壁が崩壊して24年。東西ドイツ統一記念日である10月3日には、東西ドイツ統一に関するドキュメンタリードラマを上映。10月6日には、東ドイツ時代の、国営映画会社DEFAとアンダーグラウンドで製作された質の高いアニメーション、東ドイツの女性解放をテーマにしたDEFA製作の映画など、あまり上映されることがない作品をご覧いただく貴重な機会です。

プログラム:

10/3 15:00- ドキュメンタリードラマ『ドイツ劇』第1話 (90分、ドイツ語音声・日本語字幕)

17:00- ドキュメンタリードラマ『ドイツ劇』第2話 (90分、ドイツ語音声・日本語字幕)

10/6 11:00- 『東ドイツ時代のアニメーション作品集～国家とアンダーグラウンドの狭間で』(115分、ドイツ語音声・英語字幕)

13:30- 『三人目』(107分、ドイツ語音声・日本語字幕)

会場: 京都芸術センター ミーティングルーム2 料金: 無料 [作品ごとに要申込\*]

定員: 30名 共催: ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川



10/5 (Sat) 20:30-21:00



TOUR

ニュー・ブランシュ KYOTO 2013プログラム  
ダヴィデ・ヴォンバク パフォーマンス『TOUR』

KYOTO EXPERIMENTでの新作クリエイションに先立って、「ニュー・ブランシュ KYOTO 2013」の一環として、フランス人振付家・ダンサーのダヴィデ・ヴォンバクと、ドイツ人サウンドアーティスト、ミコ・イニネンによるパフォーマンス『TOUR』(2013)を行います。

会場: 京都芸術センター フリースペース

料金: 無料 [申込不要]

主催: 京都市、アンスティチュ・フランセ関西

共催: 京都国際マンガミュージアム、京都芸術センター、京都市立芸術大学、

京都市交通局、ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川

協力: KYOTO EXPERIMENT

10/6 (Sun) 16:00-

『ジャパン・シンドローム〜ベルリン編』 アーティストトーク

スピーカー: 高嶺格、鴻英良(演劇批評家)

会場: flowing KARASUMA

料金: ¥500 [要申込\*]

10/14 (Mon) 16:00-

舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)シンポジウム  
「表現の自由をめぐって」

今年2月に発足した、舞台芸術と社会を繋ぐ全国的・国際的な会員制ネットワーク「舞台芸術制作者オープンネットワーク」。本ネットワークの事業と関連する今日的なテーマでシンポジウムを設け、会員以外の多様な参加者にも開かれた場で議論を深めていきます。

会場: 京都芸術センター 大広間

スピーカー: 齋藤貴弘(弁護士/Let's DANCE署名推進員会共同代表)、他

参加費: ¥500

申込: 舞台芸術制作者オープンネットワークウェブサイト[www.onpam.net]内申込フォームにてお申込み下さい。

主催・お問合せ: 舞台芸術制作者オープンネットワーク [E-mail: info@onpam.net]

共催: KYOTO EXPERIMENT

助成: 公益財団法人セゾン文化財団



## アーティスト・イン・レジデンス・プログラム / ARTIST IN RESIDENCE PROGRAM

ダヴィデ・ヴォンバク  
新作のためのリサーチ  
& クリエーション



アンスティチュ・フランセ関西  
JAPON-KANSAI

ダヴィデ・ヴォンバクは、2011年にヴィラ九条山に6ヶ月間滞在し、KYOTO EXPERIMENT 2011でもダンスワークショップを行った、フランス人振付家・ダンサー。フェスティバル開催期間中に来日し、新作のリサーチとクリエイションを行います。

滞在期間: 10/6 (Sun) - 10/20 (Sun)

共催: アンスティチュ・フランセ関西(旧 関西日仏学館)

## KYOTO EXPERIMENT × Panorama Festival エクスチェンジ・プロジェクト

過去2年にわたって継続してきた、京都とリオデジャネイロのフェスティバル—KYOTO EXPERIMENTとPanorama Festivalによる、エクスチェンジ・プロジェクトが次のステップに進みます。それぞれの地域で活動するアーティストを互いのフェスティバルに推薦し、新作の創作を両フェスティバルでサポートする本プロジェクト。今年からはより若手の才能にフォーカスを当て、互いのフェスティバル期間中にそれぞれの都市でレジデンスを実施します。今年の滞在期間中は、レクチャー・ワークショップ・リサーチ等を実施し、創作のきっかけを作り出す機会とします。

共同主催  
KYOTO EXPERIMENT、  
パノラマ・フェスティバル

助成:  
公益財団法人セゾン文化財団

10/21 (Mon), 10/22 (Tue)

**Baobab**ダンスワークショップ

19:00-21:30



photo: Kaoru Okuyama

主宰の北尾亘をはじめとするBaobabメンバーがナビゲートする、ダンスワークショップを開催します。上演作品中の振付を通して、北尾亘の身体の捉え方や空間デザインを垣間見ると共に、Baobabクリエーションを体感しましょう。ダンスに興味のある方、経験不問、誰でも参加可能です。

会場: 京都芸術センター フリースペース

定員: 12名

料金: 3,000円(2日間通し) [要申込\*]

10/27 (Sun) 17:00-

『superposition』 関連シンポジウム  
「“量子の新世紀”のアート&サイエンス」

会場: 京都芸術劇場 春秋座

出演: 池田亮司、佐藤文隆(甲南大学)、丸山善宏(オックスフォード大学)、

浅田彰(京都造形芸術大学)

料金: 無料 [申込不要]

主催: 京都造形芸術大学大学院学術研究センター

共催: 京都造形芸術大学舞台芸術研究センター、KYOTO EXPERIMENT

\*各イベントの申込方法

KYOTO EXPERIMENT 事務局まで、お電話(075-213-5839)もしくは公式ウェブサイト(<http://kyoto-ex.jp>)内申込フォームにてお申込みください。

**フェスティバル・ミーティングポイント**

フェスティバルをより楽しむためのスポットが、flowing KARASUMAにオープン!

観劇前後にドリンクやフードを楽しむだけでなく、観客やアーティストと作品の感想をシェアする場としてお立ち寄り下さい。

フェスティバルのためにつくられた特製スイーツなど期間限定スペシャルメニューも登場!

参加アーティストの関連書籍・グッズも販売します。

会場: flowing KARASUMA [Tel: 075-257-1451]

京都市中京区烏丸通蛸薬師下る手洗水町645

営業時間: 11:30-23:00 [L.O. 22:30]

定休日: 火曜日

※貸切のため、ご利用いただけない日程がございます。営業時間の変更やイベント情報はflowing KARASUMAウェブサイト[[www.flowing.co.jp](http://www.flowing.co.jp)]をご覧ください。



**Related Events**

9/17 (Tue)-9/29 (Sun) 11:00-19:00

**Soshi Matsunobe “Twisted Rubber Band” and “Humming”**

Exhibition by Soshi Matsunobe introducing the work which became the visual theme for this year's festival, Twisted Rubber Band, and more works.  
Venue: Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]  
48, 2F Benkeishi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Admission: Free  
Co-organized by Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.]

9/30 (Mon) 17:00-19:00

**Lecture “About [Marginality]”**

Lecture on the work of Marcelo Evelin.  
Speaker: Marcelo Evelin  
Moderator: Kazuko Kuniyoshi (Dance Researcher, Critic)  
\*English with Japanese translation  
Venue: Kyoto Art Center Meeting Room 2  
Admission: Free [No reservation required]

10/3 (Thu) 15:00- / 17:00-

10/6 (Sun) 11:00- / 13:30

**Screening “Understanding East Germany through its films”**

Program:  
10/3 15:00- Documentary “German Theater” vol.1  
17:00- Documentary “German Theater” vol.2 (90min. German / Japanese subtitle)  
10/6 11:00- 『East German Animation –Between State and Underground』(115min. German / English subtitle)  
13:30- 『Third Person』(107min. Japanese / English subtitle)

Venue: Kyoto Art Center Meeting Room 2  
Admission: Free [\*Reservation required each film]  
Co-presented by Goethe-Institut Villa Kamogawa

10/5 (Sat) 20:30-21:00

**Nuit Blanche KYOTO 2013 Program**

**David Wampach + Mikko Hynninen TOUR**  
Venue: Kyoto Art Center Multi-purpose Hall  
Admission: Free [No reservation required]  
Presented by Kyoto city, Institut français du Japon-Kansai  
Co-presented by Kyoto International Manga Museum, Kyoto Art Center, Kyoto City University of Arts,

**Artist in Residence Program**

*David Wampach*  
*Research and Creation of new work*  
David Wampach is a French choreographer / dancer who conducted dance workshops at Kyoto Experiment 2011 while he was a resident of Villa Kujoyama for 6 months in 2011. He returns to Kyoto during the festival and continues his research and creation of his new work.  
Length of Stay: 10/6 (Sun) -10/20 (Sun)  
Co-organized by Institut français du Japon-Kansai

**Kyoto Experiment × Panorama Festival Exchange Project**

The two-year exchange project between Kyoto Experiment and Panorama Festival (Rio de Janeiro) will take the next step. The festivals will recommend talented local artists to each other's program and support their new work. From 2013, focusing especially on young talent, the festivals will host artist in residence programs in both cities. Artists are required to carry out lectures, workshops and research, with the aim of creating new work, during the residency.  
Co-organized by Kyoto Experiment, Panorama Festival  
Supported by The Saison Foundation

Kyoto City Transportation Bureau and Goethe-Institut Villa Kamogawa  
In cooperation with Kyoto Experiment

10/6 (Sun) 16:00-

**Artist Talk**

Speaker: Tadasu Takamine, Hidenaga Otori (Theater Critic)  
Venue: flowing KARASUMA (Meeting Point)  
Admission: ¥500 [\*Reservation required]

10/14 (Mon) 16:00-

**Open Network for Performing Arts Management (ON-PAM) Symposium “On the Freedom of Expression”**

Venue: Kyoto Art Center Japanese-style Hall  
Speaker: Takahiro Saito (Lawyer)  
Admission: ¥500  
Presented by Open Network for Performing Arts Management  
Co-presented by Kyoto Experiment  
Supported by The Saison Foundation

10/21 (Mon), 10/22 (Tue) 19:00-21:30

**Baobab Dance Workshop**

Venue: Kyoto Art Center Multi-purpose Hall  
Admission: ¥3,000 (2 days) [\*Reservation required]

10/27 (Sun) 17:00-

**Symposium “Art and Science in the New Quantum Century”**

Panelist: Ryoji Ikeda, Fumitaka Sato (Konan University), Yoshihiro Maruyama (the University of Oxford), Akira Asada (Kyoto University of Art and Design)  
Venue: Kyoto Art Theater Shunjuza  
Admission: Free [No reservation required]  
Presented by Kyoto University of Art and Design Graduate School Academic Research Center (ARC)  
Co-presented by Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design, Kyoto Experiment

\*Reservation  
Call Kyoto Experiment Office (075-213-5839) or send application form at the official website [<http://kyoto-ex.jp>]

**Festival Meeting Point**

flowing KARASUMA will be the festival's meeting point. This is a spot to enhance communication between artists and spectators of Kyoto Experiment. Enjoy food and drinks before and after performances. You can purchase related books and artists goods as well.

Venue: flowing KARASUMA [Tel 075-257-1451]  
Open Hours: 11:30-23:00 (L.O. 22:30)  
Closed on Tuesdays

※ Due to prior reservations, the cafe may not be open at certain times. Please confirm the availability beforehand on the website.

NXTSTPは、欧州の舞台芸術フェスティバル間での共同製作およびその巡回公演を促進することを目的に、2007年に発足したパフォーミング・アーツのためのネットワークである。第二期は2012年11月1日から始動。2012年から2016年にわたって、EUの認定文化プログラムとして、5年間の財政サポートが決定している。

第二期の特徴は、ネットワークの更なる飛躍とより幅広い交流を求めて、国境を超えて異なる文化圏から4つのアソシエイト・パートナーを迎えたことにある。その4つである、KYOTO EXPERIMENT(京都)、On Marche(マラケシュ)、Panorama Festival(リオデジャネイロ)、Dense Bamako Dance(マリ)は、それぞれ世界から注目されるフェスティバルである。

こうしてネットワークを拡張していくことで、NXTSTPはグローバル化と文化的アイデンティティの相克について再考するきっかけをネットワークの核にもたらさう。アソシエイト・パートナーは、NXTSTPがサポートする作品だけでなく、NXTSTPそのものの機能についても見出ししていくことになる。「外」からの視点を得ることで、ヨーロッパのアイデンティティに関する実り豊かな議論が繰り広げられることを期待している。

NXTSTP is a network European performing arts festivals that came into being in 2007 to provide an extra shot of energy to the co-production and circulation of the performing arts in Europe. The first term of NXTSTP ran from 01 November 2007 to 31 October 2012. The network consisted of 8 of highly established performance arts festivals in Europe.

The second term of NXTSTP (/The Second Generation/) kicked off on 01 November 2012 and has been awarded a five-year funding from the Culture Programme of the European Union (2012-2016).

To extend the exchange of competence and artistic dimension of Next Step even beyond Europe's borders they have selected 4 associated partners from different cultural backgrounds, active in strategic regions of the world, which includes Kyoto Experiment (Kyoto) as well as Festival On Marche (Marrakech), Panorama Festival (Rio de Janeiro) Dense Bamako Dance (Mali).

By opening up the network in this way, Next Step can be an ambassador for the European arts scene of tomorrow, and simultaneously bring the reflection on globalisation versus identity to the core of our own network. The associated partners will discover the functioning of Next Step as well as the productions it supports. They will nourish the debate on European identity with a view from the "outside".

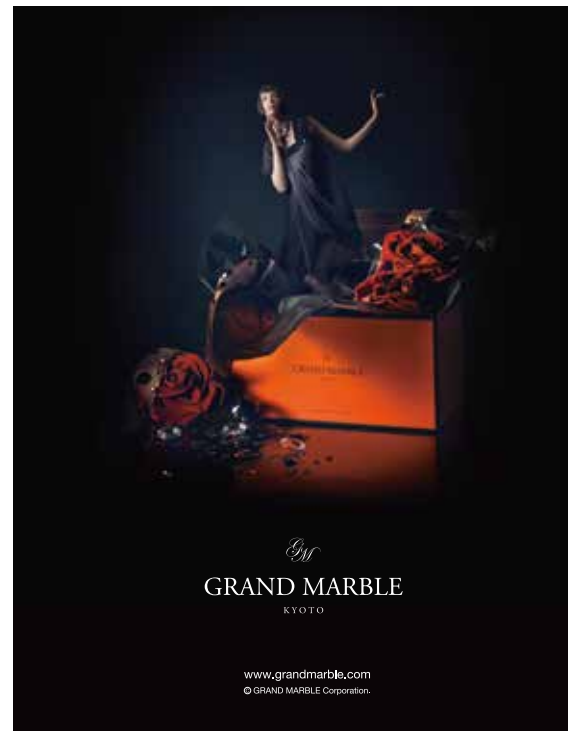
パートナー

Kunstenfestivaldesarts(ブリュッセル)  
Alkantara Festival(リスボン)  
Baltoscandal Festival(ラクヴェレ)  
Dublin Theater Festival(ダブリン)

Göteborgs Dans & Teater Festival(ヨーテボリ)  
Noorderzon(フローニンゲン)  
steirischer herbst festival(グラーツ)  
Théâtre National de Bordeaux en Aquitaine(ボルドー)



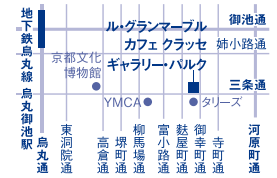
**NXTSTP**



ル・グランマーブル カフェ クラッセ  
Tel: 075-257-6877



ギャラリー・バルク  
Tel: 075-231-0706



京都市中京区三条通御幸町北西角三条ありもとビル  
1F・2F  
阪急河原町駅より徒歩15分 / 三条阪駅より徒歩15分 / 地下鉄東西線京都駅役所前駅より徒歩5分

## ロームシアター京都

ROHM Theatre Kyoto

2016年1月オープン予定!

1960年に開館し、市民のみならず多くの著名なアーティストに親しまれてきた京都府会館が、2016年1月、音楽、演劇、伝統芸能等、様々な分野の舞台芸術が披露される劇場としてリニューアル・オープンします。その名も「ロームシアター京都」。岡崎の地に新たに生まれ変わる世界文化都市・京都を発信する「文化の殿堂」にどうぞご期待ください!

施設概要

メインホール 約2000席	サウスホール 約700席	ノースホール 特設約200席
パークプラザ レストランやカフェが併設された賑わいスペース	プロムナード チケットセンターなどがあるパブリック通路	ローム・スクエア 野外イベントが行える憩いの場

指定管理者:公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団

## ニュー・ブランシュ KYOTO 2013 ~パリ白夜祭への架け橋~ ー現代アートと過ごす夜ー

www.nuitblanche.jp

2013.10.5(Sat) 入場無料

会場: 京都国際マンガミュージアム、アンスティチュ・フランセ関西(旧 関西日仏学館)、京都芸術センター、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA(アクア)、京都市役所前広場、地下鉄烏丸御池駅構内、ゲート・インスティトゥート・ヴィラ鴨川、市内アートギャラリー

主催: 京都市、アンスティチュ・フランセ関西(旧 関西日仏学館)

### @ 京都国際マンガミュージアム

- 18:00-22:00
- ・オープニングセレモニー
  - ・マチデコ・インターナショナル
  - ・日仏アーティストによる映像と音楽演奏

### @ 京都芸術センター

- 10:00-22:00
- ・ダヴィデ・ヴォンバク(ダンサー/振付家)+ミコ・イネン(サウンドアーティスト)によるダンスパフォーマンス
  - ・カティ・オリブ(ビジュアルアーティスト)による光のインスタレーション
  - ・ステファン・ドゥ・メドロス(造形作家)によるパフォーマンス

### @ アンスティチュ・フランセ関西

- 21:00-深夜1:00
- ・高橋匡太(アーティスト)によるライティング
  - ・エリック・シェーファー(音楽家)、ウルリケ・ハーゲ(音楽家)による音楽演奏
  - ・河合政之(ビデオアーティスト)、浜崎亮太(ビデオアーティスト)によるビデオアートパフォーマンス
  - ・双子の未亡人(ダンスグループ)によるダンスパフォーマンス
  - ・ニジマアツシ(サウンドアーティスト)、竹村延和(作曲家)、村井啓哲(サウンドパーformer)によるサウンドパフォーマンス
  - ・京都造形芸術大学「京造ねぶた」展示



# KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭 2013 クレジット

主催 京都国際舞台芸術祭実行委員会 (京都市、京都芸術センター、公益財団法人京都市芸術文化協会、 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター、公益財団法人京都市 音楽芸術文化振興財団)	京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局  プログラム・ディレクター兼事務局長 橋本裕介  事務局 垣脇純子 門脇俊輔 丸井重樹 和田ながら  広報 多胡真佐子  制作 井出亮(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター) 岩村空太郎(京都芸術センター) 小倉由佳子 川崎陽子(京都芸術センター) 川原美保(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター) 藤田瑞穂(京都芸術センター)
共催 立誠・文化のまち運営委員会、京都府立府民ホール アルティ	
協力 Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・バルク]	
協賛 株式会社資生堂 トヨタ自動車株式会社	
助成 平成25年度文化庁国際芸術交流支援事業 独立行政法人日本万国博覧会記念機構 公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団 公益財団法人セゾン文化財団	テクニカル・コーディネーター 大鹿展明 尾崎聡 夏目雅也  インターン 富樫多紀 餅田菜津希 元行まみ  翻訳 板井由紀 ジャスティン・リチャードソン エリック・ルオン  ドキュメント・コーディネーター 竹内厚  アートディレクション 原田祐馬(UMA/design farm)  デザイン 山副佳祐(UMA/design farm)
認定 公益社団法人企業メセナ協議会	WEBディレクション UNGLOBAL STUDIO KYOTO  WEBデザイン TRACE  WEBプログラム・WEBコーディング FLAM(桐谷典親)
京都国際舞台芸術祭実行委員会	京都国際舞台芸術祭アドバイザーボード 小崎尚哉(編集者 / 『REALTOKYO』『REALKYOTO』発行人兼編集長 / あいちトリエンナーレ2013舞台芸術統括プロデューサー) 古後奈緒子(舞踊研究・批評 / dance+) 萩原麗子(京都芸術センター)
委員長 森山直人(演劇批評家 / 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター主任 研究員 / 京都芸術センター運営委員)	
副委員長 富永茂樹(公益財団法人京都市芸術文化協会業務執行理事 / 京都 大学人文科学研究科教授)	
委員 尾本恵一(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団専務理事・ 事務局長) 木村武志(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課 担当課長) 篠原資明(京都大学大学院人間・環境学研究科教授) 畑律江(毎日新聞大阪本社学芸部専門編集委員) 吉田真雅恵(公益財団法人京都市芸術文化協会専務理事) 渡邊守章(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター所長)	
監事 城本聡美(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長) 長谷川昌史(公益財団法人京都市芸術文化協会事務局長)	
顧問 太田耕人(演劇評論家 / 京都教育大学副学長) 茂山あきら(狂言師 / NPO法人京都アーツミーティング理事長) 千宗室(裏千家家元) 建畠哲(公益財団法人京都市芸術文化協会理事長 / 京都市立芸術 大学学長) 平田オリザ(劇作家・演出家 / 劇団「青年団」主宰)	

# KYOTO EXPERIMENT | Kyoto International Performing Arts Festival 2013

Organized by Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee (Kyoto City, Kyoto Art Center, Kyoto Arts and Culture Foundation, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)	<b>Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office</b>  Program Director / Executive Director: Yusuke Hashimoto  Office: Junko Kakiwaki Shunsuke Kadowaki Shigeki Marui Nagara Wada  Public Relations: Masako Tago  Production Coordinators: Ryo Ide (Kyoto Performing Arts Center) Sorataro Iwamura (Kyoto Art Center) Yukako Ogura Yoko Kawasaki (Kyoto Art Center) Miho Kawahara (Kyoto Performing Arts Center) Mizuho Fujita (Kyoto Art Center)  Technical Coordinators: Nobuaki Oshika So Ozaki Masaya Natsume  Interns: Taki Togashi Natsuki Mochida Mami Motoyuki  Translation: Yuki Itai Justin Richardson Eric Luong  Document Coordinator: Atsushi Takeuchi  Art Direction: Yuma Harada (UMA/design farm)  Design: Keisuke Yamazoe (UMA/design farm)  Web Direction: UNGLOBAL STUDIO KYOTO  Web Design: TRACE  Web Programming / Web Coding: FLAM (Norichika Kiriyama)  Kyoto International Performing Arts Festival Advisory Board: Tetsuya Ozaki (Editor / Publisher and Editor-in-Chief of REALTOKYO and REALKYOTO / General Producer of Performing Arts of Aichi Triennale 2013) Naoko Kogo (Performing Arts Reseacher / Critic / dance+) Reiko Hagihara (Kyoto Art Center)
Co-organized by Rissei Cultural City Steering Commit- tee, Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI, Gallery PARC [GRAND MARBLE, inc.],	
Sponsored by Shiseido Co.,Ltd., Toyota Motor Corporation	
Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013, Commemorative Organiza- tion for the Japan World Exposition '70, Asahi Group Arts Foundation, The Saison Foundation	
Approved by Association for Corporate Support of the Arts	
<b>Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee</b>  Chairman: Naoto Moriyama (Theater Critic / Senior Researcher of Kyoto Performing Arts Center)  Vice Chairman: Shigeki Tominaga (Executive Board Member of Kyoto Arts and Culture Foundation / Professor at Institute for Research in Humanities, Kyoto University)  Committee Members: Keiichi Omoto (Senior Director and Secretary-General of Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation) Takeshi Kimura (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Unit Head) Motoaki Shinohara (Professor at Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University) Ritsue Hata (Editorial committee member of Arts and Cultural News Department, Osaka head office of The Mainichi Newspapers) Machie Yoshida (Senior Director of Kyoto Arts and Culture Foundation) Moriaki Watanabe (Director of Kyoto Performing Arts Center)  Supervisors: Satomi Shiromoto (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Head) Masashi Hasegawa (Secretary-General of Kyoto Arts and Culture Foundation)  Advisors: Kojin Ota (Theater Critic / Vice President of Kyoto University of Education) Akira Shigeyama (Kyogen Artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting) Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master) Akira Tatehata (President of Kyoto Art and Culture Foundation / President of Kyoto City University of Arts) Oriza Hirata (Playwright, Theater Director / Director of Seinendan)	

## 公式プログラムチケット料金 / Tickets

	アーティスト・演目 Artist, Title	前売券 Advance Ticket			当日券 Day Ticket	席種 Seat	チケットぴあ Pコード Ticket Pia P-Code
		一般 Adult	ユース(25歳以下) 学生 シニア(65歳以上) Youth (Up to 25), Student Senior (65 & Up)	高校生以下 High School Student & Younger			
1	チェルフィッチュ chelfitsch 地面と床 Ground and Floor	¥3,500	¥3,000	¥1,000		自由 Free Seating	430-474
2	マルセロ・エヴェリン / デモリション Inc. Marcelo Evelin / Demolition Inc. 突然どこもかしこも黒山の人だかりとなる Suddenly everywhere is black with people	¥3,000	¥2,500	¥1,000		自由 Free Seating	430-475
3	庭劇団ベニノ Niwagekidan Penino 大きなトランクの中の箱 Box In The Big Trunk	¥3,000	¥2,500	¥1,000		自由 Free Seating	430-476
4	木ノ下歌舞伎 Kinoshita-Kabuki 木ノ下歌舞伎ミュージアム "SAMBASO" ～バババツとわかる三番叟～ Kinoshita-Kabuki Museum "SAMBASO"	¥2,500	¥2,000	¥1,000	前売料金 +500円 (高校生以下 は同額)	自由 Free Seating	430-477
5	She She Pop シュプラーデン(引き出し) Drawers	¥3,500	¥3,000	¥1,000	Plus ¥500 of advance ticket price (High School Student & Younger are ¥1,000.)	自由 Free Seating	430-478
6	Baobab 家庭的 1.2.3 Domestic progress 1.2.3	¥2,500	¥2,000	¥1,000		自由 Free Seating	430-479
7	池田亮司 Ryoji Ikeda superposition	¥3,500	¥3,000	¥1,000		指定 Reserved Seating	430-480
8	ロラ・アリアス Lola Arias 憂鬱とデモ Melancholy and Demonstrations	¥3,500	¥3,000	¥1,000		自由 Free Seating	430-481
9	ビリー・カウィー Billy Cowie "Art of Movement" and "Dark Rain"	《パフォーマンス / Performance》			前売料金 +500円 (高校生以下 は同額)	自由 Free Seating	430-482
		¥2000	¥1,500	¥1,000			
		《展示 / Exhibition》					
		入場無料					—
10	高嶺格 Tadasu Takamine ジャパン・シンドローム～ベルリン編 Japan Syndrome -Berlin version		入場無料				—

### Notes:

- 各公演の受付開始は開演の1時間前です。
- ユース・学生、シニア、高校生以下チケットをご購入の方は公演当日、証明書のご提示が必要です。
- 車椅子でお越しのお客様は、各料金の¥500引き(介助者1名無料)となります。(お席をこちらで指定する場合がございます。問合せはKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで)
- 団体割引(10名以上)を設けております。詳細はKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで。
- 年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各公演ページをご覧ください。
- 主催者の都合による公演中止の場合をのぞき、ご購入後のキャンセル、日時の変更はできません。
- 演出の都合上、開演時刻を過ぎると入場できない場合がございます。その際払い戻しはいたしません。

### Notes:

- Theater reception opens 1h prior to the performance.
- ID required for youth / student, senior and high school student & younger tickets.
- Accessible Tickets are a ¥500 discount from the regular price and include one complimentary ticket for the helper. We may guide you to specific seats. Please contact the Kyoto Experiment ticket center.
- The group rate is applied to groups of more than 10 people. Please contact the Kyoto Experiment ticket center for details.
- Some performance have age restrictions. Please refer to the specific performance information for details.
- No refund or date change will be accepted after a ticket has been purchased, except in the case of cancellation of a performance for unforeseen reasons.
- Entrance to some performances may be refused after curtain time. Please note that no refund will be made in case you are late for the performance.

## チケット取扱 / Ticket Information

KYOTO EXPERIMENT チケットセンター  
(11:00-20:00、9/22までは日曜日)

窓口 | 京都芸術センター2F

Tel | 075-213-0820

オンライン(要事前登録) | <http://kyoto-ex.jp> (PC)

<http://kyoto-ex.jp/m> (Mobile)

京都芸術センター (10:00-20:00)

窓口販売のみ

チケットぴあ

Tel | 0570-02-9999

オンライン | <http://pia.jp/t>

### セット券

複数観劇される方へお得なセット券です。公式プログラムからご希望の演目を組み合わせてご観劇ください。  
\*当日購入不可 \*1演目につき1回のみ  
\*本人のみ有効

**フリーパス(公式プログラム有料公演9演目) | ¥18,000**

すべての公式プログラムをご観劇いただけます。

【枚数限定】

**学生フリーパス(公式プログラム有料公演9演目) | ¥12,000**

すべての公式プログラムをご観劇いただけます。

(要学生証提示)【枚数限定】

**3演目券 | ¥7,500**

公式プログラムからお好きな3演目を選び、すべて同時に予約することでお得に観劇できるセット券です。

**学生3演目券 | ¥6,000**

公式プログラムからお好きな3演目を選び、すべて同時に予約することでお得に観劇できるセット券です。

(要学生証提示)

取扱 = KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

KYOTO EXPERIMENT Ticket Center  
(11:00-20:00, Closed Sundays until 9/22)

Box Office | Kyoto Art Center 2F

Tel | 075-213-0820

Online | <http://kyoto-ex.jp>

Kyoto Art Center (10:00-20:00)

Box Office only

Ticket Pia (Japanese only)

Tel | 0570-02-9999

Online | <http://pia.jp/t>

### Coupon Tickets

Coupon Tickets are a great deal for those who would like to attend more than one performance.  
\*Advance only \*Limited one showing of each performance \*Verified holder only

**Free Pass (for all the 9 official programs) | ¥18,000**

You can enjoy all the performances from our official program. [Limited number]

**Free Pass (for all the 9 official programs) [for student] | ¥12,000**

You can enjoy all the performances from our official program. (ID requires) [Limited number]

**3 performances | ¥7,500**

You can choose 3 performances of your preference.

**3 performances [for student] | ¥6,000**

Discount coupon tickets for students. (ID requires)

Available at Kyoto Experiment Ticket Center

### KEX半券割引

当日受付で、対象公演\*の観劇済み公演チケットの半券をご提示いただくと、公式プログラムの当日券が¥500 OFF(前売料金)でご入場いただけます。

[対象公演\*: KYOTO EXPERIMENT 2013 公式プログラム/フリンジ企画「使えるプログラム」作品/オープンエントリー作品]

※半券1枚につき1名、1回のみ有効。当日券のみの取扱で、残席がある場合に限ります。

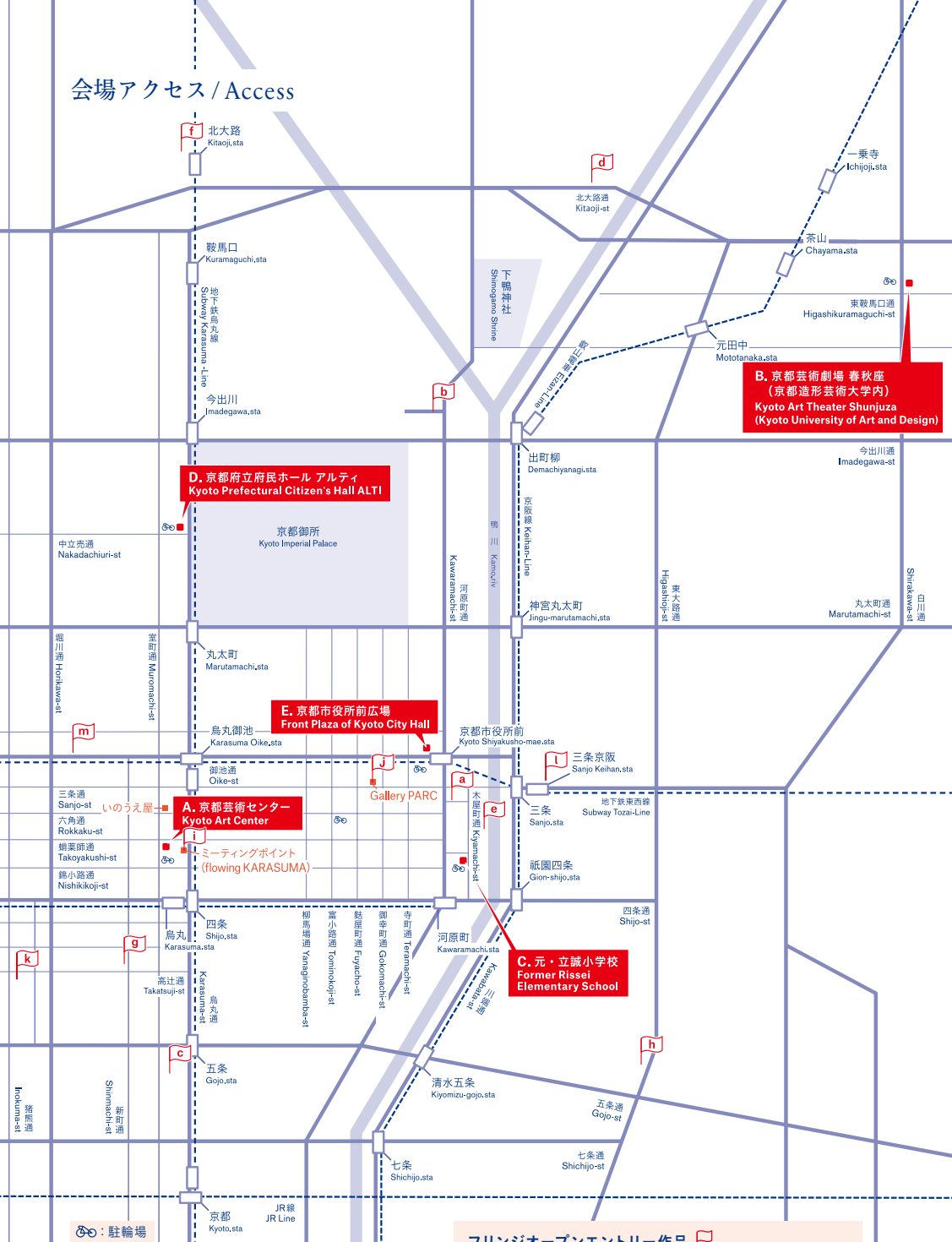
### Repeater's Discount

Show your ticket stub from a previous performance\* at the theater reception to get 500 yen off a full price ticket for an official program performance!

\*Intended Program: Kyoto Experiment 2013 official program, Fringe "The Useful Program", "Open Entry Performance"

\*\* 1 stub is valid for 1 person and one time discount. Only valid for a full price ticket on the day of the performance when the venue is not sold out.

# 会場アクセス / Access



**フリンジ 使えるプログラム**

- a** ARTZONE / VOX SQUARE
- b** 出町商店街 / Demachi Shopping District
- c** 元・立誠小学校 / Former Rissei Elementary School
- l** Pig & Whistle
- m** ギャラリー アクア / Gallery @KCUA

たまり場 @ VOX SQUARE  
ゲスト参加者のアーカイブを展示します。  
また喫茶のご利用も可能です。

**フリンジオープンエントリー作品**

- a** ARTZONE
- c** 杏坪シアター スワン / Hito-tsubo Theater Swan
- d** アトリエ劇研 / atelier GEKKEN
- e** UrBANGUILD
- f** 京都市北文化会館 / Kita Bunka Kaikan
- g** KAICA
- h** 京都市東山青少年活動センター / Higashiyama Youth Action Center
- i** flowing KARASUMA
- j** Gallery PARC
- k** 遠藤剛熙美術館 / Musée Gohki Endoh

## A 京都芸術センター / Kyoto Art Center

〒604-8156 京都市中京区室町通嶋薬師下る山伏山町546-2  
546-2, Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-213-1000 E-mail: info@kac.or.jp  
Website: <http://www.kac.or.jp>  
・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」下車、22・24番出口より徒歩5分  
※駐車場なし・駐輪場あり



## B 京都芸術劇場 春秋座 (京都造形芸術大学内) / Kyoto Art Theater Shunjuza (Kyoto University of Art and Design)

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内  
2-116, Uryuyama Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-791-8240 E-mail: k-pac@kuad.kyoto-art.ac.jp  
Website: <http://www.k-pac.org>  
・地下鉄烏丸線「北大路駅」(北大路バスターミナル)より、市バス204系統「高野・銀閣寺」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
・京阪本線「三条駅」より、市バス5系統「岩倉」ゆき「上終町京都造形芸大前」下車すぐ  
・阪急京都線「河原町駅」(四条河原町)より、市バス5系統「岩倉」ゆき  
または、市バス3系統「百万遍」上終町京都造形芸大前「ゆき」上終町京都造形芸大前「下車すぐ」  
・京阪電車「出町柳駅」から叡山電車に乗り換え、「茶山駅」下車 徒歩約10分  
※駐車場なし・駐輪場あり(原付・バイクはご遠慮下さい)



photo: Toshihiro Shimizu

## C 元・立誠小学校 / Former Rissei Elementary School

〒604-8023 京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町310-2  
310-2, Bizenjima-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-708-5318  
・阪急京都線「河原町駅」下車、1a 出口より北へ徒歩3分  
・京阪本線「祇園四条駅」下車、4・5号出口より北西方向へ徒歩5分  
※駐車場・駐輪場なし(駐輪は市営先斗町駐輪場[有料]をご利用ください。)



photo: Shunsuke Yamashita

## D 京都府立府民ホール アルティ / Kyoto Prefectural Citizen's Hall ALTI

〒602-0912 京都市上京区烏丸通一条下る龍前町590-1  
590-1, Tatsumae-cho, Kamigyo-ku, Kyoto  
Tel: 075-441-1414 E-mail: hall@alti.org  
Website: <http://www.alti.org>  
・地下鉄烏丸線「今出川駅」下車、6番出口より南へ徒歩5分  
・京阪「出町柳駅」2番出口より、市バス201系統「千本今出川・みぶ」ゆき、または、203系統「北野天満宮・西大路四条」ゆき、「烏丸今出川」下車、烏丸通を南へ徒歩5分。  
※駐車場なし・駐輪場あり



## E 京都市役所前広場 / Front Plaza of Kyoto City Hall

〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488  
488, Kamihonnojimae-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
・地下鉄東西線「京都市役所前駅」下車すぐ  
※駐車場なし・駐輪場あり[有料]



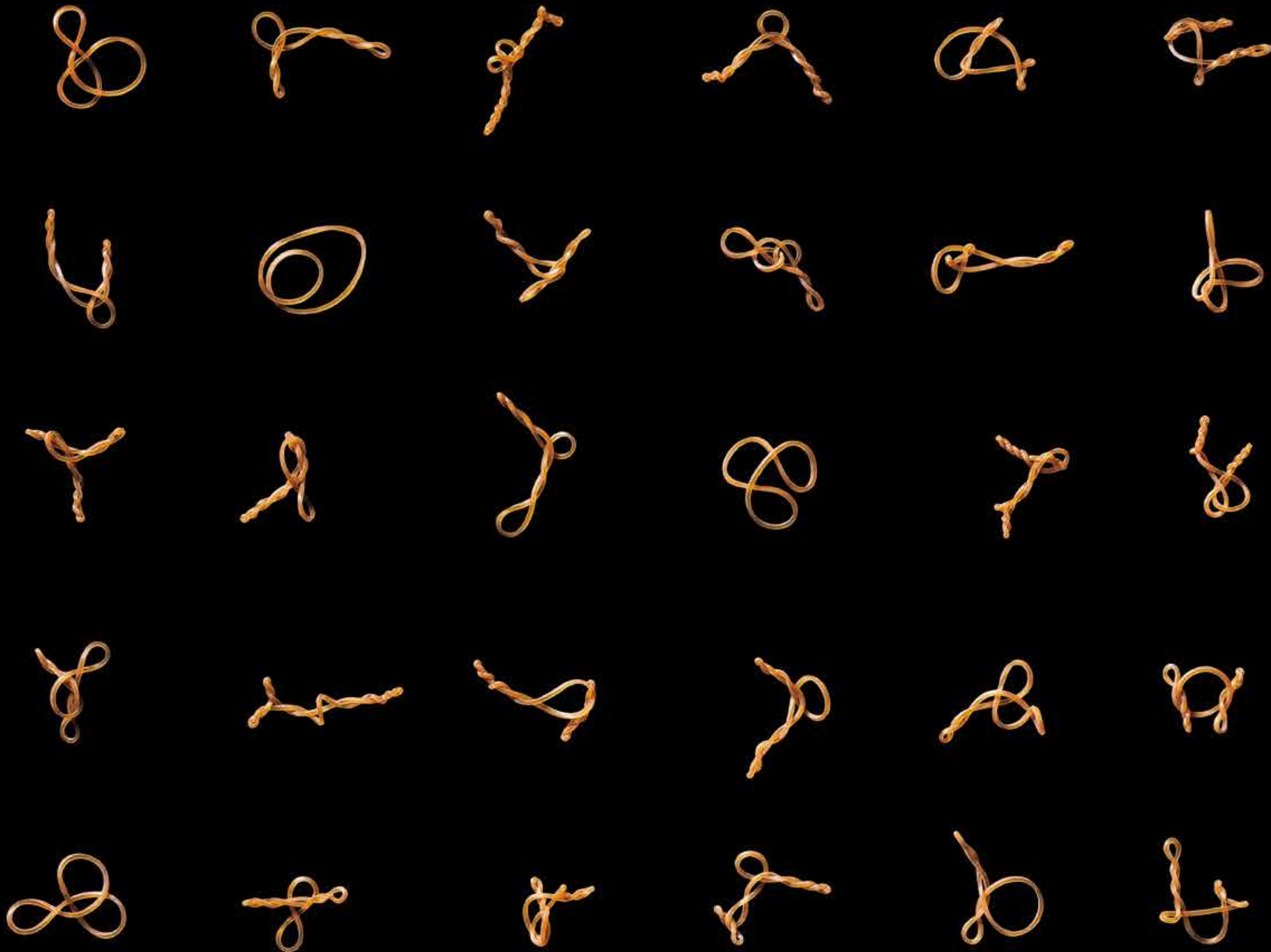
**レンタサイクル**  
京の貸自転車 いのうえ屋  
営業時間: 月・土 9:00-18:00、日10:00-18:00  
※フェスティバル期間全日18:00 から21:45 までKYOTO EXPERIMENT 事務局 (京都芸術センター内) での返却が可能です。  
貸出・返却場所: いのうえ屋  
利用料金: ¥500 / 日  
お問合せ: いのうえ屋 [Tel: 075-231-5412]  
※ご利用の方は「KYOTO EXPERIMENT レンタサイクル利用」とお伝えください。

カレンダー / Calendar

		9 / September										10 / October							上演時間															
		アクセス	28 sat	29 sun	30 mon	1 tue	2 wed	3 thu	4 fri	5 sat	6 sun	7 mon	8 tue	9 wed	10 thu	11 fri	12 sat	13 sun	14 mon	15 tue	16 wed	17 thu	18 fri	19 sat	20 sun	21 mon	22 tue	23 wed	24 thu	25 fri	26 sat	27 sun	Duration	
1	チェルフィッチュ chelfitsch 地面と床 Ground and Floor	D	15:00 ◎	14:00 ◎□																												90 min		
2	マルセロ・エヴェリン / デモリション Inc. Marcelo Evelin / Demolition Inc. 突然どこもかしこも黒山の人だかりとなる Suddenly everywhere is black with people	A		14:00 ◎	レクチャー / Lecture	20:00																										60 min		
3	庭劇団ペニノ Niwagekidan Penino 大きなトランクの中の箱 Box In The Big Trunk	C						19:30	19:30	18:00	14:00 ◎□	14:00 ◎	19:30	19:00																		90 min		
4	木ノ下歌舞伎 Kinoshita-Kabuki 木ノ下歌舞伎ミュージアム“SAMBASO” ～バババッとわかる三番叟～ Kinoshita-Kabuki Museum “SAMBASO”	B															15:00 ◎	13:00 ◎	19:00 ◎	17:00 ◎												120 min		
5	She She Pop シュブラーデン(引き出し) Drawers	A						上映会 / Screening				上映会 / Screening											19:30	16:00 ◎□	16:00 ◎							120 min		
6	Baobab 家庭的 1.2.3 Domestic progress 1.2.3	C																						13:30 ◎□	13:30 ◎□	19:00	ワークショップ / Workshop					100 min		
7	池田亮司 Ryoji Ikeda superposition	B																										14:30 ◎	シンポジウム / Symposium	19:30	19:30	70 min		
8	ロラ・アリアス Lola Arias 憂鬱とデモ Melancholy and Demonstrations	A																										20:00	17:00 ◎□	17:00 ◎	70 min			
9	ビリー・カウイー Billy Cowie “Art of Movement” and “Dark Rain”	A												20:00	20:00																	公演 60 min		
10	高嶺格 Tadasu Takamine ジャパン・シンドローム ～ベルリン編 Japan Syndrome - Berlin version	A・E																																
フリンジ	使えるプログラム The Useful Program		1. 米光一成	2. ni_ka	3. けのび	4. 澄井奏																												
	オープンエントリー作品 Open Entry Performance		1. THE GO AND MO'S	2. 夕暮れ社 弱男ユニット	3. 富士山アネット x 富士山アネット / Manos. (マノス)	4. 蛇香	5. 中川裕貴、バンド	6. 努力クラブ	7. 劇団うりんこ	8. 淡水	9. 劇団衛星	10. 村川拓也	11. 荒木優光	12. Hugues Vincent	13. 竹ち代穂 x 豊田奈千甫 = 黒子沙菜恵	14. ドキドキぼーいず	15. 笑の内閣	16. 田中千晶	17. 双子の未亡人	18. 巻劇屋	19. fukui企画	20. BRDG												
関連イベント			9/17-29 松延総司展						ニュー・ブランジュ									ON-PAM シンポジウム																

※ 各演目「□」がついた回は終演後ポスト・パフォーマンス・トークを予定しております。 □ Post-Performance Talk  
 ※ 各演目「◎」がついた回は託児サービスがご利用いただけます(有料:1,500円、要事前予約)。予約申込みの締切は各公演の4日前となります。  
 予約・問合せ: KYOTO EXPERIMENT 事務局 075-213-5839 (平日11:00-19:00)





ロゴについて

KYOTO EXPERIMENTのキーワードである「出会い / 衝突 / 対話」がぶつかり合い、外へ広がろうとする様子をビジュアル化したロゴ。600種類を越えるパターンがあり、進化する創造の場を表現している。

Kyoto Experiment's logo is a visual representation of the confrontation and expansion of its three keywords: encounter, collision, and dialogue. It is a design with more than 600 forms, which stand for the evolution of the creative spaces.

logo design: UMA/design farm



KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 京都芸術センター内  
Kyoto Art Center, 546-2, Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

Tel | +81(0)75-213-5839  
E-mail | [info@kyoto-ex.jp](mailto:info@kyoto-ex.jp)  
<http://kyoto-ex.jp>

発行日 | 2013年8月28日  
Published Aug. 28, 2013

アートディレクション: 原田祐馬 (UMA/design farm)  
デザイン: 山副佳祐 (UMA/design farm)  
編集: 多胡真佐子、和田ながら  
写真 (p1, p10-11, p52-53, p68-69, p78-79): 松延総司  
印刷・製本: 柏村印刷株式会社

Art Direction: Yuma Harada (UMA/design farm)  
Design: Keisuke Yamazoe (UMA/design farm)  
Edit: Masako Tago, Nagara Wada  
Images (p1, p10-11, p52-53, p68-69, p78-79): Soshi Matsunobe  
Print: KASHIMURA CO.,LTD.

©KYOTO EXPERIMENT

**KYOTO EXPERIMENT 2013**

京都国際舞台芸術祭